

国立国会図書館蔵『川路高子日記』

翻刻と解題および人名索引

揖斐 高

藤井 美保子 山口 旬

三浦 億人 高橋 昭男

藤川 玲満 日野 辰彦

解題

幕末期に佐渡奉行、奈良奉行、大坂町奉行、勘定奉行兼海防掛、外国奉行などの要職を歴任し、傾きかけた幕府の屋台骨を支えようと尽力した開明派の幕臣に川路聖謨という人がいる。高子はその妻である。実名は佐登子（さと）であるが、後に歌や文章を書くときには高子と称した。

高子は文化元年（一八〇四）に、家禄二百石の幕府大工頭大越孫兵衛喬久の子として江戸に生まれた。明治十五年に執筆された高子の回想録『ね覚のすさび』（『川路聖謨文書』第八巻所収）によれば、高子は十五歳で紀伊徳川家の江戸藩邸に奉公した。しかし、仕えていた姫君が亡くなったため、八年後に紀伊徳川家を辞去した。その

後、將軍徳川家斉の二十五女で広島藩主浅野斉肅の正室となった末姫に仕えたという。氏家幹人「嘉永四年、妻からの手紙『川路高子日記』を読む」（熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』所収）は、末姫は天保四年（一八三三）に浅野家に興入れしているので、高子は三十歳で末姫に仕えるようになったと推定している。

その五年後の天保九年四月二十九日、三十五歳の高子は当時幕府の勘定吟味役をつとめていた三十八歳の川路聖謨に嫁いだ。高子は初婚だったが、聖謨にとつては四度目の結婚であり、すでに聖謨には先妻や妾との間に儲けていた二男二女があった。聖謨は聖謨の養父母や聖謨の実母とも同居していた。結婚後の高子は、母として血のつながらない子供たちを育て上げただけでなく、嫁として三人の父母に仕えたのである。高子みずからはそのことを、「こゝに舅姑君

二所、主聖謨君の御実母一所、おの二人、女子二人あるを、おのれ皆養ひて、いとむつまじう、めてたき中らひなりき」(『ね覚のすさび』)と回想している。

高子との結婚後、夫の聖謨は有能な幕臣として、先に示したように出世していった。とくに嘉永六年(一八五三)には勘定奉行兼海防掛としてロシア使節プチャーチンとねばり強い外交交渉を展開し、翌年安政元年の日露和親条約締結に向けて奮闘したことはよく知られている。しかし、將軍継嗣をめぐる対立した大老井伊直弼による安政の大獄に連座して安政六年(一八五九)聖謨は隠居謹慎を命ぜられた。その後いったんは外国奉行として幕閣に復帰するが、五月で辞職。元治元年(一八六四)八月には中風の発作を起こして半身不随になり、江戸城開城の日である慶応四年(一八六八)三月十五日、六十八歳の聖謨は表六番町の自邸で護身用のピストルを使って自殺を遂げた。江戸幕府の命運に殉じたのである。

聖謨の隠居後、川路家の家督は聖謨の孫の太郎が嗣いだ。聖謨の長男彰常が弘化三年(一八四六)に二十二歳で夭折したため、彰常の長男太郎が家督を継ぐことになったのである。しかし、聖謨が自殺した時、当主の太郎は幕府派遣の留学生としてイギリスに滞在中だった。当主の太郎が不在の中、六十五歳の高子は聖謨の葬儀を執り行い、江戸市中の混乱を避けるため、まだ幼かった妾腹の三男新吉郎と四男又吉郎の二人を連れて、上総国山辺郡平沢村に退居した。妾腹の次男市三郎(高子は市三郎と血はつながっていないが仲が良かった)の養子先であった幕臣原田家の知行地が平沢村にあったか

らである。三月月半に及んだこの平沢村寄高中の高子の日記が学習院大学史料館に寄託されている。『上総日記』で、『上総日記』(翻刻付川路聖謨・高子資料目録)、『学習院大学史料館紀要』(第十三号)としてすでに紹介されている。その後高子は江戸に戻り、イギリスから帰国した太郎とともに明治の代を生き、明治十七年(一八八四)十月十二日八十二歳で病没した。胃瘍だったという。

今回翻刻紹介する『川路高子日記』は国立国会図書館蔵の高子自筆の半紙本二冊である。請求記号は特863.197。『川路聖謨遺書』としてまとめられている四十九冊のうちの二冊である。この二冊には後補の覆表紙が付けられているが、それぞれの中表紙が原表紙にあり、第一冊目の原表紙には「嘉永四年 二二ノ一 / 日記 一 / 高子」、第二冊目の原表紙には「嘉永四年 二二ノ二 / 日記 二 / 高子」と打ち付けに墨書されている。本文は半丁十行の野紙に記されており、第一冊は三十九丁、第二冊は五十二丁である。

日記は高子四十八歳の嘉永四年(一八五一)六月十日に始まり、同年の九月十七日に終わっている。この年五十一歳だった夫聖謨は弘化三年(一八四六)以来奈良奉行をつとめており、妻の高子は妾腹の次男市三郎および川路の養父母ともども奈良の役宅に住んでいた。奈良奉行在勤六年目の嘉永四年、聖謨は幕府からの召還命令を受け、六月十日に奈良を発って江戸へ向かった。高子は養父母と奈良の役宅で留守を守ることになった。江戸に着いた聖謨は、六月二十四日、大坂町奉行への転任を命ぜられた。高子のもとにその報せ

が届いたのは七月二日のことである。それ以後、吐き気を伴う頭痛という持病に悩まされながらも、引越準備を進めていた七月二十一日までが第一冊である。ちなみに、聖護は高子のこの持病を「げろげる」と名づけており、たとえば『浪花日記』嘉永四年五月十八日には、「おさとを詠するされうた　雲となり雨とはならでげろく」となるかみさまのあなよはいこと」という狂歌を書き込んで、高子の持病をからかっている。

第二冊は七月二十二日に始まる。高子たち一行は七月二十六日から奈良の役宅を引き払い、大坂に向けて奈良を出立し、その日の七時半(午後五時頃)に大坂東町奉行の役宅に到着した。夫聖護が江戸から大坂に着任するまでの間、大坂東町奉行役宅の様子、大坂の風俗や生活環境、それに江戸を離れて他郷暮らしが続いていることで愚痴っぽくなっていた養父母の機嫌などを、高子は逐一この日記に書き込んでいる。日記の最後の日付は九月十七日であるが、夫の聖護は十月二日に江戸を発っているので、大坂に到着したのは十月十日を過ぎてからである。なお、七月には「廿九日」の記事が二回続けて書かれており、その後「八月朔日」の記事が続いている。この年嘉永四年の七月は大の月で三十日までであったので、二回目の「廿九日」は「三十日」の誤記であらうと思われる。

さて、この日記の冒頭には、後になって高子自身が記した前書が置かれている。その中に「此日記は殿の君奈良御奉行たりし時、江戸より御召ありて下り給ひ、大坂町奉行の命蒙らせ給ひて、しはし江戸に滞留有らせし程、おのれは奈良に残りて御留守中、日々の

事とも記して文にかへて便りに江戸に送り参らせし。あなたよりも又江戸の事記しておこせ給へりしなり」とあるように、この日記は江戸と奈良・大坂と離れ離れになっていた「川路夫婦の交換日記の片割れ」(氏家幹人前掲稿)である。この時期、近況報告として聖護から高子に送った日記が『浪花日記』(『川路聖謨文書』第六巻所収)である。手紙とは別に、あるいは手紙の代わりに、日記の数日分をまとめて遠く離れて暮らす家族に送るというのが、川路家の家族内での意思疎通を図るやり方であった。佐渡奉行在任中の聖護の日記『島根のすさみ』や奈良奉行在任中の聖護の日記『寧府紀事』は、聖護の任地に同行せず、江戸に残って暮らしていた聖護の実母に宛てた聖護の近況報告であった。また、聖護の日記『千里飛鴻』、『慈恩集録』は將軍家茂に扈從して上洛していた孫の太郎に宛てたものであり、また聖護の『東洋金鴻』もイギリス留学中の孫の太郎に、便船を得て遙々と送った日記であった。

高子は持病もあり病弱な体質だったが、氏家幹人『江戸奇人伝旗本・川路家の人びと』(二〇〇一年刊)も指摘するように、才色兼備の女性だった。「色」については高子が美人だったことは夫聖護の自慢するところであった。嘉永六年十二月十七日、日本に開国と通商を求めるロシア使節プチャーチンと長崎で会談した聖護は、緊迫した雰囲気になった交渉の場を和めようとして、「左衛門尉(聖護のこと)妻は江戸にて一二を争ふ美人也。夫を置いて来りたる故か、おりくくおもひ出し候。忘るゝ法はあるまじきや」(『長崎日記』)と交渉相手のプチャーチンたちに語りかけた。この聖護の臆面もない女房

自慢にその場は和やかな雰囲気になつたといふ。ほかの資料から見ても、これはその場の機転としてあえて女房自慢をしてみせたといふだけではない。聖謨は高子のことをほんとうに美人だと思つていた。

高子の「才」については、聖謨の『浪花日記』七月十二日に、高子の日記を読んだ聖謨の弟井上新右衛門が、「御姉さまの文、土佐日記のごとし。女中にかゝる日記など今容易にあるへからず」と言つて「賞歎」したといふ記述がある。また『川路高子日記』の九月五日には次のようなことが記されている。「兄なる人、鯛のさしみに酒のみて、酔ておのれか日記や文や見てたわむれ事共いひしは、いとをここにこそあれ。紫式部・松浦さよ姫にはあらで紫ちんぶ・杉浦さよ姫位ならむとの殿の御言葉、大にをかし。されと夫もまだ過たらむ。紫もめん・せつたらうらかわ姫位ならむ。いと顔の皮あつ姫と人やわらはむ」。江戸の大越家を嗣いでいた高子の兄が酔つたあけく、聖謨に対し高子の文才と貞実さを賞めて紫式部や松浦さよ姫に匹敵すると言つたので、聖謨がそれはちよつと賞めすぎではないか、まあ紫ちんぶ(『浪花日記』には「はないろちんぶ」とある)か杉浦さよ姫(『浪花日記』には「松浦さよほひめ」とある)くらいなところだろうと訂正しておいたという聖謨からの報告(『浪花日記』嘉永四年八月二十五日)を受けた高子は、それでも賞め過ぎといふべきで、私の文才や貞実さは紫木綿か雪駄裏皮姫くらいのもので、そんなことを自慢したりすれば、人はとんだ顔の皮厚姫だと言つて笑つてしようと思つたのである。笑い話であるが、周囲の多くの人間が高子

の文才を認めていたことがわかる。日記の文章からも納得されることだが、高子はユーモアを交えつつ平明達意の文章が書ける才女であつた。

「才」という点では、高子には歌才もあつた。高子が誰について歌を学び始めたかは分らないが、この日記を書いた頃の高子の歌の師匠は、幕臣で歌人・国学者の前田夏蔭(一七九三—一八六四)である。日記にも九月八日に「夏蔭先生の短尺十二月、先年書給ひたりしか、其内を屏風にをし、或は望人にやりなとして不足に成たり。先生のはいつにても手に入ものとおもひて油断して大に不自由する也。此節御宅へ御出もあれば、御短尺なかひたし」などと思つている。

この日記の中にも高子の詠んだ歌がかなり多く書き留められている。率直な分かりやすい歌が多く、中には狂歌まがいの滑稽な歌も混じっているが、その一方、夫聖謨に宛てた歌には相聞風に思慕の情の詠み込まれた歌もある。たとえば六月二十二日、聖謨のいない奈良の役宅の庭を一人散歩した時に聖謨のことを偲んで詠んだ、「ふたりして遊びし庭をひとりして見るは淋しき朝な夕なに」という歌。この歌について高子は「いさゝかいせ物語のほひさへ添て、いとつたなし」と自ら批評している。『伊勢物語』第二十三段の筒井簡の話などを意識しながら、この歌は詠まれたのであろう。また七月七日、七夕の牽牛・織女の逢瀬の伝説を踏まえて詠んだ歌、「妹は奈良背は大江戸に珍しく七夕さへも今日は逢ふ日に」は、年に一度牽牛と織女でさえ出逢えるこの七夕に、自分たち夫婦は離れ離れて

違うことさえできないのだと歎いて、夫恋しさの気持を伝えようとしてゐる。

このような歌においてだけでなく、この日記にはあちらこちらに高子の夫聖護に対する敬愛慕の念が率直に表現されているが、そのほかにも養父母や実母に対する心のこもった孝養のふるまい、血のつながらない子供たちに対する深い愛情、使用人や出入りの者たちに対する暖かな心配りなど、高子の好ましい人柄が平明達意の文章の中から浮かび上がってくる。この日記は幕末期における上流階層の女性の生活の具体的様相というものが窺い知られる貴重な史料であるとともに、率直で生き生きとした表現によって、読者に清々しい読後感を与えてくれる優れた文学作品にもなっている。七去三従の封建的な女性道徳に縛られて忍従の生活を強いられていたという、ステレオタイプ化された江戸時代の女性像とは違う、心豊かに穏やかな日々を過ごしていた幕末期の現実の女性の姿がこの日記の中には見出せるのである。

ちなみに、高子の川路太郎宛の手紙二通、おさと（高子）宛の聖護の実母の手紙四通を含む『川路聖護関係書簡』一巻が成蹊大学図書館に所蔵されている。その翻刻は「成蹊大学図書館蔵『川路聖護関係書簡』翻刻と解題」と題されて、『成蹊人文研究』第十八号（二〇一〇年三月刊）に掲載されていることを付け加えておきたい。

（撰斐 高）

凡例

翻刻にあたっては次のような処理をした。

- 一、日付の変わりめには行間を空けた。また、底本にはないが、目安のため日付の上に を付した。
- 一、底本での改行には関わらず、日付及び天候の記事は独立して一行とし、以下の記事は改行した。なお、同日内の記事については原則として追い込みで翻刻した。但し、和歌については地の文と区別して改行し、独立させて二字下げで一行書きとした。
- 一、漢字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、変体仮名は現行の平仮名に改め、助詞の「江」は「へ」に、「而」は「て」とした。
- 一、底本にはまま片仮名表記が混じるが、明らかな片仮名意識によるもの以外は、原則として平仮名に改めた。
- 一、捨て仮名は送り仮名として翻刻し、合字の仮名は開いた。
- 一、新たに句読点を施した。
- 一、濁点、読み仮名は底本のままとした。
- 一、誤字についても底本のままとし、正字が明らかな場合は（ ）として傍書するか、あるいは適宜（ママ）と傍書した。
- 一、脱字・衍字については（脱力）（衍力）と適宜傍書するか、あるいは明らかな脱字の場合は、本文中に（ ）として脱字分を補った。
- 一、見せ消ちを含めて訂正箇所は、訂正後の形だけを示した。

一、判読不能箇所は で表した。

一、欄外の書き入れは、「(欄外)……」として、本文中の適当な箇所に繰り込んだ。

一、墨字の「々」は「々々」に改め、「々々々」は底本のままとした。

* 翻刻の礎稿は次のような分担で各自が作成・発表し、全員で検討して確定した。

揖斐(前書、六月十日～十二日) 藤井(六月十二日～十四日、七月八日～十二日、八月一日～三日、九月二日～五日) 山口(六月十五日～二十二日、七月十三日～十四日、八月四日～十日、九月六日～十一日) 三浦(六月二十三日～二十五日、七月二十三日～二十六日前半、八月十一日～十五日、九月十二日～十七日) 高橋(六月二十六日～二十八日、七月十九日～二十二日、八月十六日～十九日) 藤川(六月二十九日～七月三日、七月二十六日後半、八月二十日～二十四日) 日野(七月四日～七日、七月二十七日～二十九日、八月二十五日～九月一日)

* 人名索引の礎稿は山口旬が作成し、調整の取りまとめも担当した。

日記

一

高子

此日記は殿の君奈良御奉行たりし時、江戸より御召ありて下り給ひ、大坂町奉行の命蒙らせ給ひて、しはし江戸に滞留有らせし程、おのれは奈良に残りいて御留守中、日々の事とも記して文にかへて便りに江戸に送り参らせし。あなたよりも又江戸の事記しておこせ給入りしなり。時過ぬれは去年の枝折、今はやり捨へきものなれと、さすかによしの川へたてなき、いもとせの書かはしたる物なれは、取おくへしとあれと、其頃おのれやまひかちにてやむを常なれは、筆取事もいと物うくて、からうして物せしみゝす書のいとくつたなう、歌はさらなり、文字かむなのたがへるなど、いとくみたりにて、書けかしたるをみるも今更はつかし。後に人もしみるらむと、其ことわりをかくしらず。高子

嘉永四年

六月十日より

にき

一

たか子

六月十日、晴。

殿様御機嫌能、此地御発駕なり。七つ時の御供揃なれと、例の人揃おそく、仕出し御膳のしたくも不手廻しにて、御膳上り頃は、はやしのよめのほからくといふ頃にて、御出立はとく明はなれ、みかさ山に日影さす頃也。御役宅御けん関より御歩行にて御出也。自等も御いとまえて、いなり山のかたはらのついちの所より、ひそかに御通行をかきま見る。きのふまでふりにふり、かきくれたる雨雲の、今朝はさり気なく晴、朝風冷しく吹なと、誠にあつらへたることの天気なり。御供の人々、御送りの人々等あまたしたかへて御出のさま、いといさましく、いつもの旅の御門出なり。時雨かちなるを、古郷への御門出、また自等も御跡よりやかてゆくと思ふ心のいさみ、御名残りをしき方はおくれで、たゞ嬉しくそおもふ。

さし登る日影とゝもに生まれは光もそはる旅衣かな

跡追てゆくとおもへは別れ路にふかくはおかぬ言の葉の露

午過る頃、木つまで御送りの順作帰る。益御機嫌よろしく御旅行と承り安心。順作物語、これまでの御奉行御立に木津までは御見送り人すくなき由なれと、此度は格外に多きよし。出入の儒医はさらなり、与力・同心も人数多し。与力は老人残りたる斗、余は不残出たり。みな名残りをしみたる心さしあらはる。夫に出入町人共の外にも、道すからにこゝかしこにまちいて、市中の町人共御送りする。これをもひたゝしきよし承る。こはとし頃、民をふかく御いつくしみ有し御徳のこゝに及び、市中の人々親をうしなへるこゝちにて、此ほとより御立の節は何御荷物なりともちて、御送つかふまつりたしとねかひたるを、御ゆるしなれば、せん方なう皆御通行のみち辺に出てをかみたる也。年頃とめる民には御をしへ事有、まつしきものには御すくひなど、いたらぬくまなき御恵み数々、こと更去年ことは米高にて別て御心を尽され、且こたひ御立まへには別段にあまたの御すくひなど有し故成へし。いと嬉しきと事限りなし。御立御跡は誠にしつかに成たり。例ならばまつ枕とりて休まむといへと、後の出たちを心にいそげは、何くれと又かたつけものなとして、日暮れは表奥のしまりなど心付て打ふしぬ。今夕江戸へ状出す。

十一日、快晴。

御隠宅御二方様御機嫌御宣候。御彘駕朝より民蔵はしめ腹痛の病人ありしか、追々快よし。乍去此節腹痛流行、小遣ひ中番共かはるくやむ。しかし一二夜にて全快。八助のきひしかりしか、一番はやく全快。ゆるやかに来れるは中く長引なり。けふは京都御出立、御安心と御噂いたす。市三郎初旅、暑さの時分一入案事らるゝ事也。追付自もゆく旅なれば、別るゝもをしからねと、この頃難波の御奉行跡ならむと専ら人々いへは、もし左あらは、市三郎にははらく対面かたしと心にかゝりてむねいたく、立まへ物語にも泪かちなれば、跡いはてやみ

にしことも多かり。いかに成行らむと思ひつゝけて、けふもまた帰りのしたくもす。きのふもけふも勝南院、見舞に来る。俊蔵方栄も替事なく宜と申たり。たつ、なら女とかくしかくいたさす、見てもらう。たつは、いのめの痛にて、昨今ぬさりなり。しかし、気分等はず替、勝南院には針をたてゝもらう。所から故、うみも多くは出す、くち明たる斗也。かうやく付置。なら女はとかく長引も病氣から故也。勝南院へあらめ・かき・たこ遣す。夕刻、花井りう助来る。昨日御送り帰りおそく成たるとて、けふ来りてくさく昨日の御別れをしき事共、或は佐々木先生の御仕置場をいやかり、一里斗も廻り道せむといひしを、やうく酒やによりて酒のませ、なまぬひにしてつれ行しか、其所に至りてはまた病ひはつし、色々むつかしき事云。扇をかさし十軒斗の所ひた走りに走りぬけ、茶やにて塩三合もとめ、わらんしをはしめ、かしら衣類の差別なく不残きよめいたし、りう助供にいたるまでも同じやうにいたさせ候よし。りう助、手まね身ぶりにて物語、大笑也。けふはさと夕方よりいさか持病の痼ねつ出、心わつらはしければ、打ぶす。またくすこしつかれ也。

十二日、終日晴曇、折く雨。昨日より冷氣。

此御二方様御機嫌御宜、御母上なと例の御縫もの御出精なり。御父上は雨天にて少し御こまりなれ共、まつしこく御おとなしく候。さとつよき持病にはあらねと床に居る。一度はきたり。常よりよ程かるし。食事少しつゝたうへる。昼後、栄来る。気色も宜、手遊ひなど持参す。しはし遊ぶ。物かたりの内にとの事時くおもひ出しますと涙くみ申をきけは、いと哀也。自のかく淋しきにくらへても病中の子供心さそかし心細からむと察おもふ。昨日も勝南院云、俊蔵へ栄いとま乞の節、私も大きに快ければかならず御案事なくお立よと申たるよし、誠におとなのやうなりと涙くみかたる。常わんはく成事いふは、わさとしやはけて見せるのとみえたり。(欄外)栄物

語は俊蔵へは御無用。中く思ひのたねならむ。たゞ無事にて遊びに来たりと、乍恐御きかせねまづり候。一々刻加賀や京よりかへりしとて御届物品々持参す。益御機嫌よく御旅行と承り恐悦也。京都にても所々より御到来物等囃御こんさつ御噂いたす也。

十三日、晴。折く曇事もあれと昼より晴。冷氣也。

此御二方様御機嫌よく、さとも今日は出勤也。めつらしく一日にておきたり。たつもきのふ勝南院来て、いをのめの所厚かわきりとりたれば、けふははれも引大によるしく、一兩日にははや歩行も自由に成へし。けふより長持詰ものにかゝる。江戸立の時より雑物ふへ如何せむ、当惑。色々かた付ものしけるに、高橋様・坂もと様へ上る晒の包たるを見出したり。こんさつにて入落したるなり。定し御さかすと恐入候。尤晒は沢山御持参、御用意あれは其御地にて御包よろしく被仰付候様に、其外落たる事共囃と案事暮なり。片付ものもすこしすめは日暮になる。慰に庭に出る。ひとりなり。撫子の花はや盛り過、やつれたるも折から哀なり。たねを取て、

別をしやせめてたねたに取て行かむ年月めてゝなてしこの花
いよく哀なり。

主かへて千世めてられよ常夏の花の名くちてねさへかれすて

水無月の夕暮にはめつらしく冷氣にてくるれば、宵の間月もよし風もよし。御旅やかたいかこの月を御覽すらむとおもふ斗、歌もいてこす、いたつらになかめて入ふす。

○十四日、快晴。よ程冷氣、羽織なと着る。

御旅行御しのきよろしくと悦思ふ。市三郎いかにや、時候にあたり持病など発しはせむか案事思ふ。此御二方様御機嫌宜、自等無事、日々片付ものいたす。おもふより荷多なり、捨らるゝものは捨れ共捨かたきもの多くなり、舟廻しのつもりに捨也。殿様袷のおとう召、おこしまき取落たれば、惣年寄たよりに廻し上る積。けさ庭に出たるに池の蓮はしめてひらく。

うるはしく咲初にけり蓮はな露の白玉打かさしつゝ

年頃殿のめてさせられしか、花をみす御立ありしは名残をしく、

さきはえもなくおもふらむ蓮はなことはめてし君に捨られ

おもひ出るまゝにかき記す。ひとり言笑ふへし。未の頃より俄に東の方くも立、風おこり、夕立雨つよふる。けふはさや廻りとかうけ給る。御旅中いかゞ神さへ鳴ていとおとろくしき空の気色、むね安からず。仰きみて、君はいま浪のわたりやなる神の首につけてもななめやるかな

程なくやかて雨も神もやみたれと、打くもりて折く小雨少しつゝふる。冷氣なり。荷こしらへなとするに、さして暑おほえす。湯あみなとする頃は寒く覚る也。いざりのたつ、けふはおきて出る。いまたちはにて、をして出たり。なら女とかく不快にて勝南院も長引といひ、自分にもとり込の中に打ふし居るもいやとみえ、養生暇乞にまかせて今夕下遣す。とにかく女にたゞり、此節また式人女同様也。しかし舟廻しなどの品は見つくるひ出しさへせは、誠一郎・角馬よく手伝ひ日々こしらへいたす。

十五日、曇。冷氣なり。御道中には至極の時候、御一同、御仕合なる事也。此御二方様御機嫌御宜一同無事。

けふは古反古書状なと片つける。例の少しつゝよみなから片付る故に此仕事一番はかとらす。紙くつやにめくら

をやとふとやらもことわり也と、ひとり歎みせらる。たなくしらへたる中に久しく明さりける箱に、なき父のふみあまた出たり。けふは御忌日にさへあれは、いとよなつかしく、ひとつ二つよむに誠に浅からぬ親の御いづくし御ふみ毎にあらはれたり。中にも御遺言に御けうくんの一巻と、三州の旅宿よりいたつきにつきて給はりし御文にいたりては、むねくたけ泪のすゝるにとよめあへす。ひとり打ふしなきたり。

無おやに逢こゝちする水くきのあとにありくおも影立て

我身世にあらむ限りのをしへ草ふかくかしこき身の守なり

いつまでも見てはてしなき筆の跡泪とともをしつゝみけり

かく、なき父を思ふにつけても母のいとう老たるに、いかに対面をまちわひ給はむと思ふもかしこくもつ体なし。けふ、みの刻より雨ふりいて、冷し。折くはれてしけふりといふ様也。御立後は別て来る人もなし。心静に片付ものに目を暮す。相かはらす兩人の煎餅とりくる。しかし健之丞は順右衛門留守故か、長くはおらず、およはれせむといへとも、不承ちにや、きかぬふりにて、かへる。母ひとりに成、また捨られむかと、あやふむ成へし。しかし大丈ふにていたつらに遊ぶなり。今夕、江戸へ書状出すと民蔵申す。其御地へ御着後に届へしと申故、日記斗出しおく。御帰着御悦は御左右うけ給候うへ、めて度差上申へし。此節は御隠宅へ毎夜御機嫌伺にまゐりても、唯江戸帰りの御物かたりのみなれば、折く用人共出、もしや大坂ならば荷物はかくなむなと申せは、甚御き嫌悪、御尤千万恐入たる事也。自分等もおなし事にて何とぞ江戸御役をと祈居なり。

難波かたすみよしとてもなにかせむたゝなつかしきむさしのゝ原

六月廿二日、めつらしく朝より晴天。時候も相応、四つ時頃、八十三度也。

土用人に天氣になりたれば続くへし。けふは品川御着なれば別て御勇敷御満足ならむ。御供の人々も嬉しくいさむへし。御泊まで御出迎の人々もあらむ。かく天氣なれば江戸も晴天ならむ、など千里の空おもひやるもをかし。此御二方様御喜嫌御宜一同も無事也。此地は客来もなし、人はすくなし、誠に日く淋しく成る。道中したくも大かたとのふ。貞助、相かはらす丁噂によく詰もの言人にていたす。手伝ひも兩人あれ共、子供同前、専ら表奥の共、貞助ほね折いたす。幸ひに先病氣も宜、顔付は十分ならず候へ共、氣丈に一日も引不申はたらく。安心也。用人共も定し色々調物等世話しくあらむ。なれ共御留守中は中くひま有やうすなり。御地へ今言人も御つれあらは御宜からむ。噯、御地は御家来すくなく御用は多し。御不自由にて御家来も世話しくと噂致候。けふ池田奥方御引払之節の上下人数書見るに、家来の下女まで入て惣人数五拾何人とかある。大身故尤ながら大名の様成と民蔵いふ。夫にりう助の佐蔵のと付祭りまで切々大そふ成御供也。こなたは上下まで十五六人也。数取と笑ふへし。さと、自養生のため朝夕兩三度と庭歩行いたす。折からひとり言、

ふたりして遊びし庭をひとりしてみるは淋しき朝な夕なに
いさゝかいせ物語のにほひさへ添て、いとつたなし。夕方、俄に東の方雲立雷鳴、夕立いたす。暮頃より晴、冷氣になりたり。七十七度也。

廿三日、晴。朝冷氣、七十七度也。

殿様御機嫌よく品川御立。けふは江戸御入の御日積なり。天氣も快晴。一人恐悦なり。御母上御初御満足御待請、噯御にきく敷、六とせふりにて御揃遊し御対面、御かたみの御満足はいか斗かは。中く記さむはおるか也。遠くをし斗奉るさへ嬉しく、ふくをつむけふの御よろこびをおもひて、

逢見てはまつ嬉しさの泪のみかたみにいはむことの葉もあらし

けふにしてみな悦にかへるなり六とせのうきはたゝかたり草

市三郎を御覽して、母君のいかに御悦ならむと、

はゝこ草さこそ愛らめいさきよき我なてし子の花の生立

いさゝか自慢の様にきこえ侍らむか、歌なれは御ゆるし。俊蔵はしめ御供の人くも嘸つかれもあらむながら、江戸入を嬉しと悦ぶらむ。つゝかなしや。つね三郎、初旅の江戸めつらしからむ。併、御宅の大とり込、御客来の多く、御取次などひまなきにおとろくへし。休足も成かたく、さぞ嘸こまるへしと嘸いたす。昨日も、けふも、りう助来る。御道中、江戸の御事のみ御嘸申上る。相かはらすけん気よく、家内も無事の由ゆへ、乍恐つね三郎、御前へ出候節、御きかせ願ふ也。此地御二方様御機嫌よく、父上今日より御休薬、御惣体御全快。其外一同無事。暑中に付、例表へ御到来の御品、奥へ廻り候へ共、右は表日記に当り御覽に入へければ、爰には記さす。しかし、奥向へ到来は記すへし。今夕、二条宰相へ用人共まねかるゝ。民蔵は断にて、順作斗行。御立後なるに懇なる事也。貞助気文成しか、昨日あたりより時候に当り、引、腹痛いたし、とかくはきもくたりもせず難義の由、桐山へみせ候。時候あたり薬手当いたす。舌人役、何卒早く全快いたさせたし。夕八つ時頃また夕立。雷鳴つよく、暮頃よりはれる。

廿四日、晴天。八十度也。

土用中にはしのきよし。殿様、今日は御用召かなと、一同御嘸申上る。此御二方様御機嫌よく一同も無事。父上、今朝五つ時過より、春日二月堂其外、御いとま乞の御見物に御出。御供、順作・誠一郎也。尤、御かこにて御

出。むさしの、茶屋、御休所也。かゝや助蔵より土用み廻、団扇五本到来。けふ例年の通、与力・同心へ葛水被下遣す。花井りう助、今日勝手まで来る。咄しに、きのふの夕立雨にてならも出水いたし、床上へ上りたる所も有、けか人も有しよし。すてにりうけいの所なとも床まで付そふ成し故、家内はりう助方へ立退参たると咄す。いつこか池ひらきたるよし、りうけい近所成へし。しかし、其内水引たり。花井に別条なし。右、女共咄しにきゝたるとて、自に咄也。山にても油断ならず。此三、四日、日々夕方は雷鳴夕立いたす。今夕も遠雷鳴。なら女病氣にて、此程下宿いたりしか、宜とて上る。其女いふ。昨夕の夕立はおそろし。春日山に住ほら吹出したれは、夫故、水出たり。ひさしくかやうの事なかりしか、珍らしく今年是有きと人いふよし。雷も落たる由。馬かた舌人なかされ死したると評判也。ほら貝は山より出るものにや。貝といへは海よりと思ひしに、珍らし。かゝる事、山には有物にや。殿様に伺ひたし。

廿五日、晴。朝七十九度也。

よへは珍らしくあつかりし。此御二方様御機嫌よく一同も無事。けふは、ろうのとが人に素めん遣す。例は七月なれとも取越、立まへに遣す。けふは心さしの日にもあれば、別て施し也。よ助おらねは、民蔵世話やき、女とも誠一郎なとかゝりて、素めんこしらへる。うまく出来。殿様にも御着後けふ等は、すこし御心のとまり給はむなど思ふ。悦ひの中へ言葉いむ事なれば後いはねと、つらゆきの土佐帰り、小松の歌に似たる事、御身につみてとおもへは、いとむねいたし。

うれしさのまとるにひとつことたらぬなけきをくみておもひやるかな
さりとも、

老松のかはらぬ色と二もとのこのこの小松見てをなくさめ

おのれも、遠からず歸らむ事、朝夕におもひながら、これにつきては、

嬉しさとまたかなしさと二筋に落る涙をいまよりそ思ふ

貞助不快。見舞に女遣す。腹中はりたるは少しゆるみたれと、とかくいまた食すれはいたむよし。いしは、かく別の事にも不申、唯暑さ当りといふ由。動気なとつよくつかれたる体に見ゆると女いふ。一体、病後よわりたるうへなれば、つかれも一人有むと思ふ。何分、丈ふに全快いたさせたし。誠一郎、両御門主へ暑中御進物使に参る。今日も出役に出る。給人代り也。五条山瀬戸もの焼より、焼ものゝ吸物碗十人前つゝ、御隠宅と奥へ到来。饑別なるへし。葛粉一箱、移りに遣す。上方には焼ものゝすいものわん、風流にてはやるよし。八つ時頃、遠雷、夕立いたす。

廿六日、晴。八十度也。蒸あつし。

此御二方様御喜嫌よく一同無事。昨夜六つ時頃、江戸よりの十六日出御状来る。殿様御奉書御到来に付、六日限出したるか延着、十五日に江戸へ着たる由。表用人共への状みる。母君より御紐置の御書、御札、守御符等頂戴有難。母君御初御一同御喜嫌よく恐悦。俄に御待請の御したくにて、大に御取込と察。貞助今日出勤、いまた顔付あしゝ。与力御米渡し出役に無據出る也。夕方又雷鳴強し。夕立雨よほとふる。蒸暑し。八十五度になる。夕方庭にをり立みれば、萩花さく。

たか為にいそきひもとく萩か花あるしも見ぬに秋またすして

といへば、女共おまへの為にいそきしならむといふに、

この秋はみず別れむとおもひしにやかてうれしき萩の初花

おのれにはわかりたれと、この歌、人には心得かたくみるへし。

「(欄外) みる主なきといへは句統よろしけれ共、無にては甘からず。此所いさゝか苦心。」

廿七日、晴。八十一度也。

此御二方様御機嫌よく一同無事。日々御地の御噂のみ也。御隠宅にても同じ。殿様御道中以来かつほの御さしみ上りあき被遊へし。上方下り故、所々よりも心さし、かつ魚被進る成へし。付て、

おかへりを嬉しくたれもまつの魚先万世と君にさゝけむ

など、おもひやりまゐらす。八時頃より大雨大雷也。めつらしく皆々色をうしなふ程なり。いかなる事にか、土用入頃より日々雷鳴、夕立せぬ日は一日もなし。とかくしめりかちなり。けふは与力初一流へ例の通、素めん遣す。栄ほう此節はよ程よろしく、此分なれば道中も氣遣ひあらしと、勝南院いひけるよし。誠に仕合也。御前御案事戴候事故、御吹てう申上度と染申たり。貞助続けて出勤安心也。市三郎如何哉。旅つかれもなく、御側御用向勤るか承りたし。

廿八日、晴。八十一度也。昼後八十七度に成る。

此御二方様御初一同無事。さと今朝六つ半時より春日二月堂其外へ参る。尤、見物也。民蔵・貞助・角馬・女共三人供也。先例もあれは本供にて参る。立派にて誠に有かたき事、老母などに見せたし。春日二月堂大仏はさら也。道すから野辺山辺、木も草も宮もわらやもみな別れと見れば、名残をしからぬはなし。むさし野の茶やにて

休む。しはし茶をのむ間に、そうし喜三郎庭に廻りて向の生駒山其外の見渡しの講しやく細やか也。稲の実のり
いかにとはするに、おとの様御苦勞に被遊しが、まつ今の姿にては随分よろしといふ。いかにや。道すから新
植の桜楓をよくみる。おもひしより数多し。木はかたなりなり。所々のとかに見物して帰宅せしは四つ半時にま
たし。他行は、はやきもの也。けふ道草にひろひたる歌、御笑ひに記す。春日社にて、

別れそとおもふ泪の露おきぬかしこき神のみまへなからも

立かてに心とゝまる神垣やまた二たひは越かたき身と

所々新植の桜楓を、

春秋を千世も栄へよ花紅葉風の便りに我はきかなむ

むさしのゝ休所にて鹿を、

親鹿に小鹿打つれたのしきや遊ぶ夏野に小草はみつゝ

さほしかの間なくあさりて夏ながら草深からぬ春日のゝ原

女ともあゆみつかれたるをみて、

春日野も若草山も別れなりけふはよく見よ足たゆくとも

さる沢の池に衣掛柳・八重桜の古跡なとみて、

さる沢の池のかゝみに枝たれて柳さくらの影ぞ涼しき

土用中の歌なれはくされたるやうにて捨物也。花井りう助、暑中見舞に来る。千歳ちこ菓子持参。娘とらえ、過
る廿六日に千石へ引移、けふ三つめとて赤飯并にまんちう祝くれる。此地の風三つめには、かならずまんちう取
かはすよし。江戸なら皆子餅と申所也。里ひらきも三つめにする由。例の自慢娘故色々はなしいたす。勝南院来

る。たついささか暑当り、当分の事也。さとも昨日より少し持病気故案事たりしか、けふ無滞社参も済たれば見廻たり。草臥たるのみにて持病にはならず。誠一郎、両三日強く風邪にて引故、葉蔭。風斗外にしさひなき由、勝南院いふ。昨日の大雷に三か所落てけかいたしたる人も有といふ。興福寺内寺へ二か所て外は何とかいひき。けふ斗は雷雨なしと思ひしに、七つ頃より又々大雷雨、よる六つ時頃まで鳴続け、皆よわり、いかに成行、去年の江戸のやうにやなといひて、人すくなにて一入侘しかりき。

廿九日、晴。八十四度也。夕方（マ）むし蒸暑し。八十七度也。

此御二方様御嫌よく一同も無事。しかし、まさ、たつ、あつさ当りにて引。当分事也。興福院尼より使尼をもて、京都菓子并にたに尺三十葉、留守見舞として到来。使口上、いと懇なり。何ぞ挨拶にやらむと民蔵に談し置たり。佐々木先生より暑中見舞、本直し一升到来。經節、移りに遣す。別当子僧来る。虫気全快にて仕合。勝南院へ到来の菓子折、暑中見廻に遣す。惣年寄、来月二日江戸へ出立に付、飯田丁への届物類遣す。其内に紀州の千広より御到来の歌つえかきもの等、ゑたよりもらひしかわ足袋、仕舞こみ置し目ぬきの不動其外小道具、新右衛門様へ被進当の春日藤上下地なとさし立たり。盆頃には相届く成へし。歌つえは夏蔭か水野なとへ御進物に成らむかと出す。笹屋七郎兵衛より暑中見舞、女の夏半ゑり二到来。今夕もまた雷雨、尤強くなし。政、夕方より出勤。たつ、とかく頭痛強、勝南院よふに、暑当りとして不参。

七月朔日、晴。八十二度也。夕刻蒸暑、九十度甚也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。此節別て日々江戸御左右を待事、一日千秋の様におもふ。道具も着類も不残

仕舞、あけ荷など皆へたれば、一日も早く立たく不自由いはむかたなし。かこ入のもの斗左右に置、用弁。勝南院来る。不快先快よし、水式升斗はきたりといふ。少し顔やせたり。誠一出勤。「欄外」けふも夕刻雷雨なり。強くはなし。」

二日、晴。八十六度半也。よへは暑し。昼は八十八度也。

此御二方様御喜嫌よく被為人、一同も無事。たつ不快宜出勤。御門佐蔵母より、よふかん二棹到来。まんちうや重次郎より御隠居様へ御慰にと、かんでんの砂糖入極甘上る。御父様御当惑にて、ふるへ声にて御持参、移りを宜と被仰候。酒好へ甘きものやる程きのきかぬはなし。此間肴や理助より、すたこの御肴、夕方御慰にと上る。大悦遊し、よき御慰に成たり。おのく志はひとつなれと、かんじるとかんぜぬにて悦と腹立に成。物事皆かくなるへし。目うへの人には猶よく心つくへしと思ふ。移りに鼻紙、扇子など遣す。今日も八つ時頃遠雷、雨はなし。七つ時過、京都若狭や并に笹や七郎兵衛より書状、殿様大坂町奉行にて仰蒙恐悦来る。され共いまた御宅状不参故、もし相違も斗かたくと落付て、一入御便いかにと待。六つ時頃、御宅状到来、まつ嬉しく聞く。母上、殿様よりも御直書有かたく拜見。殿様御道中御喜嫌よく、御日積之通、去る廿三日江戸御着、即日御奉書御到来。廿四日御登城之所、大坂町奉行にて仰蒙候段、御吹聴誠に以恐悦至極に存上候。久々に母上御初御一同様へ御対顔、誠に御満足の程限なく察、恐悦に候。品川御出迎の御客以来、日々の御客、御賑々敷御事共伺、誠に以有かたき御事に存上候。いつれ御役替のけつかふとは存上なから、御左右無之内は切々心配存上候所、今さらのやうに存、有かたく唯々落涙に及び候迄に御座候。此御二方様にももしや江戸御役にもやと御心たのしみに思召候所故、一度は御本意なき御様子にて恐入候へ共、何分殿様之結構故、有難被仰御喜嫌よく入せ被為候。殿様御直

書御悦に御座候。さとなとも母上并に老母対面延、其所は残念に候得共、女はさかひをこえすの一言に何事も相弁へ、けつかふを有難存奉候。

七月三日、晴。八十二度。昼過九十巻度に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。乍去大坂と申御役替にて、父上大に御より御尤、色々御いさめなど申上。まつ御動には成不申候得共、別て暑さに御こまり故、五苓散など差上る。御不快には不有、大坂か御癩に当りし也。けふは殿様御滞なく御着の御左右并に御役替の恐悦旁、御隠居様方へ御酒御吸物上る。民蔵初へも態と遣す。今夕、隆助妻娘同道にて暇乞乍、御在動中りう助御懇命蒙りたりとて礼に来る。幸ひ心祝ひの酒肴などあれば振舞、別れの印とて、さとへきぬ足袋三、扇子到来、有合の鼻紙、袖口切など遣す。常三郎御供被仰付候を殊の外有かた狩ウツ、御礼申出き。なら女とかく不快、痢病のきみに付、昨夕下げ遣す。残女ともいつれも少々づゝ申分がちにて服薬いたす。不相替勝南院繁昌にて、さと初恐入也。大坂御奉行にて医師等学者等はもとより出入町人まで大悦別て恐悦をいふ。嬉しき物から古郷をおもへは、

むさしのゝ尾花こひしをおもひきや難波にまねくあしの追風

用人給人妻等一同、此度の恐悦とて出る。

四日、晴。八十四度也。朝より暑し。

此御二方様御喜嫌よく一同無事。乍去さと今朝より持病にて打ふす外に容体なし。例の通。

五日、晴。八十五度。昼頃より八十八度強し。

此御二方様御喜嫌よく、さとも同篇なれとも少しかるき方か。四五日殊の外暑気強、例の通り。御隠居様方御こまり、あちこち御所替、御寐也。さと暮頃熱気少し覚め、かゆ少々給る。

六日、晴。八十三度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと今朝より大いに宜。此分にては明日節句は着替も出来る成へし。民蔵今朝興福院辺へ仏参に行ときく。興福院へ一日の相談に到来砂糖、有合の画など順作に見させて送る。暮六つ時頃、江戸より廿九日出御状到来。母上、殿様よりも御書御日記拝見。先以御一同様御喜嫌宜、恐悦。乍去、殿様御暑さ当り余程の御容体之所、すみやかに御全快之由、一度はおとろき亦恐悦存上候。一体夏は御不得手、去年も其御気味有しと打寄御うへ申上る。母上御案事、御一同の御心配恐察、猶此後御用心存上候。御立後、御道中、御着後之御日記誠に御細やか成御事、其夜はとみに拝見も尽しかたく、明日節句の楽しみにいたし打ふす。民蔵順作御書下け、民蔵へ相渡す。

七日、晴。八十二度也。七夕には冷しく、夕方八十八度也。

此御二方様御喜嫌よく、七夕の御祝儀不相替御祝、一同も無事。今日は表奥共病人なし。長屋家内共は少々申立の不快。おとき一人礼に出る。子供は不残出る。殿様御日記、此父上にはほちく御よみ被遊候へ共、母君はよめぬ故、よめと仰られ、おのれもたのしみ、節句の遊びによむ。今にはしめす御つはら成御事共、其日く其事共、見るかこことく聞かこことく、或は笑ひ或はかなしみ、幾度も鼻打かむ。女共も皆まありてきく。よむもきくも

なかぬはなし。廿三日はかねてかゝるへしと思ひやり奉て、其頃よみたりし愚歌も、をのつからかよひたり。唯恐入たるは母上の御気性、実に烈女の御一言、さすかは殿様の御実母様と恐入たり。中く凡の老人のやうに愚智被仰候は、いさめの申方も有之候へ共、あまり御立派の思召にて、別て落涙とめかたく、むねをいたましめ申候。数ならぬおのれか病身の事さへ、朝暮御心に懸させ、御案事の御沙汰、実にもつ体無事に御座候。此度御目通り叶はぬ事、誠に残念尽しかたく候へ共、御立まへ御物語のことも侍れば、何とそをしても大坂御見物ながら御登りをいまよりねかふのみ。太郎人品別段の由、重畳。書物よみおぼえも宜敷由たのもしく、殿様の御満足をし斗。おくに御詫叶ひ候事、何奇難有、これも落涙の一つに候。夜の明けたる心ちす。幾之進耳遠にて長談実に恐入候。誠に老兄の事存吾人落涙いたし、嘸自分にも不弁ならむと心くるし。しかし大混雜のさわきもきこえず、中く人に人より気は安からむかと、をかしくも思ふ。さとに置いては父の名残りと思へは、少しも耳聞こえる内逢度思ふも人情ながら、愚智成へし。馬は着後全快にや。今夕御二方様へ節句に付、お酒上る。殿様御留守中誠に淋し。依て順作当番に付、御相手によぶ。焼肴斗江戸の事のみ打寄御噂いたす。けふも定し松魚ならむ。御客来御混雜なるへし。けふの節句は、やつかはりたるに思ひつく歌、

いもはならせは大江戸にめつらしくたなはたさへもけふは逢日に

星の手向もきのふの夕つ方ももひいて、俄にたにさくよ竹よといひていはひ手向ぬ。きのふは花井隆輔用人共初へ饒別の酒振舞にまねかれたれと、人少に付断。右に付、此方へ持込にて地走いたす。随分念入りたるよしなから、をしいかな、夜る五つ時頃やうく品々持参。其よりはしめたれば、中には床よりいてくうもの有。甚めいわくのよし。前広より案内有し地走のかくおそきは、無節ながら、ならの風にて、夜々の酒盛はやる故、一向気のどくげもなし。朝夜の明ぬ内、ちやうちんにて順作家内は春日参りして、明ぬ間にかへりたるといふ。江

戸風の人とは大に違ふなり。此間とらえ奥へ来りしも夜る五つ時頃成。まさなとおこり、はかく敷失礼と申したりしか、けふの咄にて夜るの世かいおもひしりぬ。昨夜九つ時まへ、ぢやう口ほとくたく。何事や歌出るに、花井より女中衆へ御夜食にとすし共外色々送る。女共あきれて今なん時よときけは、今四つ時過と申たり。一寐入してお夜食も大笑といひて、品々は水にひやして今朝くひたり。少しくさしといふ。気のなかなら人のくせ也。御笑ひ。しかし俊蔵初へは御咄し御無用。常三にわる口いひてはあし。

○八日、晴。七十八度也。冷氣。昼後八十八度に成る。

此御二方様御機嫌よく一同も無事。出立の荷こしらへ不残出来たり。父上なと一日もはやく立たいと披仰、ならに御あき、日々一入御こまり御尤也。昨夕大坂御同役御家来より用人共へ文通有。追々爰も一同の出立手續かけ合、与力より有よし申来ると順作咄す。江戸はいまたとふそくなとの御用心のよしなれと、誠にならは安心。長持も半々にて並立有ど火事もなし、そくもなし。用人表の御次の間に寐る斗、昼は明けはなし也。さと手許用たんす用心いたす斗、其外はいまにへりなし。女共なとも此節ひまなり。江戸の混雑御氣のとくと申居る。勝南院来る。いろく江戸の咄し聞て御噂申上る。父上少々御不通しに付、御薬上る。政も暑さに当これ亦服薬。寿美より暑中見舞として奥へふた物入くわし来る。葛粉遣す。大坂より奉行所の用達菊屋といふもの参り、引越に付入用の品等先例の書付帳持参之由、用人共申出る。

○九日、雨。冷氣。七十九度也。暮頃より快晴。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。政も出勤。花井りう助、時候み廻に来る。栄遊ひに参る。病氣全く快氣とみ

える。げんきにてかけ廻り遊ぶ。江戸へせん香花火なたりやりしなと咄す。殿様御案事越故、御安心の為記す。此節は江戸も少しく御居合にてならの御咄しも出来るならむ。常三郎初なら人、江戸見物もはしまるへし。土産によく見るへし。殿様御不快如何哉、御噂申上る。

○十日、晴。よへまでの雨にて冷氣。七十六度也。

此御二方様御喜嫌よく一同無事。此節下部も人少なれば庭もそうしさせず、草はおのかまゝ茂りて広き庭なれば、やゝひたちの姫君の御住居のやうに成たり。はめなどの恐あれば、さすがにさとも夕露わけて庭もありきせず。馬場などは御立後一度も見たることなし。

ふみわくる人しなれば時を得て草のみ高くあるし顔なる

萩はいさゝかつゝさけれと、薄はまた気色はみもせず。おのれこゝを立いつる頃までにはいかにや。

やよ薄ほには出てゝよまねかれてかことにとまる別れならねと

なら女の代りに今日宗吉の娘やとひに引越。十九といへと小からにて、飯たきには人品よろし過る故、もしはたらき出来ぬ時はこまる故、心みに三日斗やとひにおく也。大坂にも少し居、この頃迄菊寿にいたる由、武家やしきへおきたしと宗吉願ふ也。去る七日京都より御呼出にて直之進出立。昨夕帰南之由。殿様大坂町奉行御役替の御達し有之由。今日一同恐悦申上にて市中一同へ御ふれ出る由。御玄關の御道具など引て、自分初誠の御役宅拝借人に成たり。常とても下部等御役宅風にてりきむ事をせいしあれ共、今日よりは別て皆相心得、龜末無之様無事を祈。勝南院其外の人々も敷居越の挨拶は心を付へしと女共へ申付たり。火の用心など別てきひしく申付る。

○十一日、曇。昼より雨降。八十三度強し。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。江戸より御状まゐらむと、昨今弥殿様御不快益御宜、御出勤もありしか、安からずおもふ。新家へもふみ上候はつながら、日々出立まへの混雑にてふみは上ず。此御老人様方益御機嫌よく被為入、御氣丈に暑氣も御しのき也。いまた大坂引越日限不定、これに御たんそくにて、御身には別て御しよさいなく御こまりなれと、かれは御いさめ申上、一日く御暮也。大坂へ被為入候は、所替また少しは御紛も有へしと申上、夫を御たのしみ御氣丈に有せられ候。此趣鉄作様御出之節、宜御伝言御安心に御咄しねかふ也。

○十二日、曇。七十九度也。夕刻より雨。八十二度に成。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。栄遊ひに来る。よほと丈ふ付きふとりたり。此節太郎・敬二郎御側にて殿様嘸々満足ならむとをし斗る。此地の煎餅取も朝夕参るに付、猶御地両孫の事噂いたす。市三郎旅勞にて持病は発らずや。宝蔵院の淋しさをいらさるおもふもをかし。さと昨日より少々暑あたり。尤つかれの方にて暑当は毛斗ふしも不致ころく例の通也。宗吉娘相応に付、抱候。

十三日、雨。八十度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと今日は気分宜。昨夜、江戸より六日出御状到来。殿様より御日記并御書共有難、母上よりも不替御懇書難有。御一同様御喜嫌よく、母上も御氣張御よろしく、あとの御世話御こまやかなの御やうす伺、有難恐悦。殿様にも御つゝき御全快、三日に御出勤の由、誠に恐悦也。御日記御細々と有がたく楽しみ拝見。おくに朝夕の御側御用いたし、其外諸役相つとむる由、切々嬉しく井上御両所様の御かけにて

おのれも、いか斗大慶也。殿様井上へも御出被遊候由、恐悦。扱、此度、御出立には両孫御同道の御積之所、太郎の義は井上御二方御深切の思召にて御引留被遊度由、ま事にこれも有難御尤也。凡の御世話なら此度幸ひ御世話払と申、御安心の所、母上の所をふかく御案事御賢慮の所、扱々恐入候。一体、母上大坂へ御逗留に御出もあらむと存、左候へは両孫共論なしと存候へ共、母上御登り御承知無故の事と存候へは、扱々さと等におきても母上の御慰めなきを恐察いたし、しひて御同道をとほ申上がたく、其内別紙に委細申上へし。殿様御書中に大坂へ参り候は、万恥からぬ様可致との事、々御尤に存上候。唯々此御父上此御書中にて別て御歎息色々御愚智も御尤と存、また恐入候。併とかく御いさめ申上候間、御安慮可被遊候。市三より書状参、よく細に申越悦入候。嘸勞候半に、不得手の手紙等苦心と察入候。併早速の書状さし越呉候も悦入候。今夕は玉まつり庭火も淋しく候。江戸にては賑々敷、嘸無至の御悦ならむと、此盆は一入御祝祭りと恐察候。

十四日、曇。朝は冷氣。七十六度半。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さとも今日は起、快盆祭り御用も相勤候。昨夕、勝南院来る。おのれへ饒別とて団扇二本くれたり。龜末の事よといさ(か)おもひくたして相応に礼申置たり。帰りし跡にてみれば、献上の通りの仕立にておのれか定紋桐を付たり。例の気性故よほと心を入たる成へし。勝南院、大坂を悦、きのふも咄しに是悲御喜嫌伺に参上、二条・佐木なども同道の積に毎度申すと咄す。江戸へ御返事傍、書状出し度といへは、盆中故出ずと云。せひもなし。日暮頃雷鳴強し。

十五日、晴。八十五度也。

此御二方様御喜嫌よく一同無事。さとも今日より仕舞いたす。中元祝も淋しく、但盆祭りは例の通。昨今たん子・牡丹餅などに付、市三郎噂いたす。出立前市三郎申すには、此度徳をいたすは喜三郎斗也。此暮に米餅出さす、たゞ取成へしといふたりしが、此頃きけは矢張料にて月わりにいたし納めたる由、中小性等は出立まへ早引取行たりしとき。余り手廻し宜、笑ふ也。此頃、天気も相応にて作方も宜き由。此節、米高も引下り凡百廿匁とか申事也。

十六日、晴。七十九度也。昼より八十六度に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと此ほとより夜中ねむりかね連夜に及び、昨夜などは少々気分にさわり四足ひえ、汗頭より出、例ならず女共までさわかしたりしか、明方より落付たり。され共ねむられず、明しかは今朝勝南院呼来る。見せたりしか、矢張癩症と申す。おのれはもし心の乱れる病ひにもやと氣遣ひしか、左はなしといふ。今日は快よく平生の通。花井りう助来る。女共へ饑別、足袋一足つゝ也。けふは飛脚や来て舟廻しの荷こしらへ致す。貞助続快、老人にてはたらく。ほね折也。

十七日、晴。朝より曇し。八十二度也。

此御二方様御喜嫌よく一同無事。さと今朝は持病の頭痛に成る。昨夜は快寐せし故、囁けふは宜からむとおもひきや、あきれたるよわむし也。春日へ灯らう納の事風闘にや、いまた夫共きこえず。さし付け人に問も如何おもふ也。噂有しは有し由也。さはいたし度なるといひしを、例の口さかしく世にいひさわきし物ならむか。村田の君へ御対面の節、宜御厚意の御礼を願ふ也。夏かけ先生へも御無沙汰宜御侘これ亦願ふ。夕刻江戸への書状渡

す。明日出也。勝南院来る。さと持病斗外に容体なし。

七月十八日、晴。八十八度也。昼頃九十度に成る。

此御二方様御喜嫌宜一同も無事。さと持病もかるき方にて今夕より全快、食事いたす。昨日八つ時頃、宗吉倅兩人共道中無滞帰りて台所まで参る。江戸御一同様御喜嫌御真、御家来御無事を申す。女共皆出て江戸の咄をきく。取まく斗也。江戸見物したる咄をす。吉原をいらんを見たりやといへは、いな帰りの道書てはこまる故、はやく行、早く帰りたれば、おいらんはみす、唯系らい広い事と申す。女共一同笑ひ、案内はなしやと問。いなすべていつ方へも案内なし。ならの人四人にて江戸絵図を見ながら見物せしかは、夜るは道にまよふ故あまり出すと云。其事おのれきゝて、外はともかくも吉原を昼見るは蛩かこをひるま詠むるか、さい日に地ごく廻りといふ類にて、しつかにて切々残念なりしよ。第一番の江戸の花をみせぬ江戸自慢の俊蔵初に似気なしと笑ふ。せめて残りのなら人には見せ度物也。紙井戸やより葛、もめんやより足袋、饑別に到来。花井りう助来る。来る廿一日、先用出立。廿六日、一同出立の話定。

十九日、晴。八十六度也、昼より九十度に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと今日は全快。今夕花井りう助より御饑別として御隠宅井におのれへ酒肴五種取揃地走到来。今昼より順作・貞助等御賄也。

廿日、晴。八十二度也。昼より八十九度也。

此御二方様御喜嫌御宜一同も無事。勝南院来る。さと持病快。父上御通し不宜とて御心配。勝南院診候所、何等申分不被為有。御不通にてもくるしからず、切々御老体には御丈ふなる御腹也とかん心いたし、おほめ申。残暑強時節御丈ふにて恐悦也。折ふし御心持あしくと斗被仰は全此節御心のまゝならず、御癩とみえたり。昨夕りう助持参の料理など召上り、御酒宴にて少し余分召上り候へとも今朝も御申分なし。貞助一体は宜、気丈に勤しか、いし申には出立前腹中そうじいたしたしとて、十七日夕かたよりつよきげさい相用ひ、はきくたしよほととの難儀にて、かたはらめにはよしなき事したりといふ程也。昨日よりおもゆ少々つゝたへる。今日もいまたおも湯なれ共気分はかなりよろしとて出勤。明日は先用に出立故、切々案事る。いしは大事なしと請合。桐山はらん方の由、りやうし別段也。真悦より饒別に団扇二本到来、至てりつは成品、二月堂の御札よりもはるかにありかたし。花井りう助来る。夜に入、江戸より七月十四日出の御書状到来。御日記御細書共有かたく拝見。先御一同様御喜嫌宜恐悦。しかし母上少々御中暑の御きみ被為入由、御かろき事とは乍伺、御案事申上る。御着後御悦と色々御氣配之御つかれにあらせらるへし。おくに何くれと万事御世話行届由、誠に今日に置いて悦尽しかたく安心。御日記中例ながら御つはら成事共御物語のこゝちにて幾度も拝みる。いまに御客来朝よりゆふへにいたるよし、切々御賑やかにて恐悦ながら御混雑ならむ。あまり奈良にて客の御応答六とせ絶たれば、一度にこたひ御引請なるへし。小笠原出かけ引かけに参候由、不相替色々御物語きゝて咄のたねにいたすならむ。江川太郎左衛門殿御せつ法にて、母上大坂へ御同道の思召に御治定の由、大悦の事也。楽しみ待奉る。太郎より手紙さし越、ことの外宜出来かん心。愛ら敷心さしふかく悦入候。おくに・市三郎よりも細に書状、乍例忝次第也。めう寿いまた気丈にて御め通りに参たる由おとろく。いかにすゝみたらむと腰のあたりおもひやるも哀也。今宵は江戸の御便有て嬉しき物から、例のむねとゝろきてねむりかたし。

花の頃のあらしならねとふる郷のたよりはむねをさわかするかな

二十一日、晴。八十四度也。昼より八十八度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。今朝六つ時過頃、順作・貞助先用として大坂表へ出立。家内共召連る。貞助不快如何と氣遣ひしか、今朝はまた宜、氣力も大につきたる由也。花井りう助来る。榮来る。弥惣体よろしく丈ふ付きたり、俊蔵安心すへし。きのふ大越母よりふみ来る。殿様御土産として色々給り物有、別段に老母へ御もくろく御めくみ有、誠に恐入有かた狩、吹聴申おこす。おのれかこたひ帰府せぬを残りをしけれど、丈ふにさへあれはよし。命は天なり、たとへ年月ふるとも違事も時節あらはあらむと申。氣丈にて安心せり。飯田丁へ参り御対面申さむとたのしむ由、又御世話ならめとをし斗る。今夕民蔵より一封江戸へ書状出すとききは、おのれも一筆さし出す。おくに・市三郎へ返事遣したくおもへと、あわたししければ此度は遣さず、太郎へ斗返事やる。母上へも御不快中故此度はふみ奉らす。唯々とみに御病ひおこたらせ給へ。御養ひ専ら御大切にあそはされ候へかし。来る廿六日出立に治定せしかは、今少し也。相かはらす民蔵・順作も出精なり。御留守故何角心配察す。老人女斗の主人相手ゆへ万端心遣ひ成へし。民蔵氣丈に有之、併氣短に成たり。

嘉永四年

二二ノ二

日記

二

高子

七月廿二日、曇。八十三度也。折々雨にて夕刻も同じ。

此御二方様御喜嫌宜一同も無事。今朝、民蔵使にて勝南院へ業礼遣す。在勤中自をはしめ女共なと世話に成、御留守中は別て深切にいたしくれしかは、外に蒔絵小つか一本と御新造向の銀懷中はし細工ものやうの品を取添遣す。父上少々御手痛に付、真悦御りやうち上る。そら手とか申也。たく莫子をあたへし池の魚の年月なれて、くつの音につれてかならず集まる。けふもそれやるとて思ひつゝ、

人にして水の心はあらねとも魚もなれてはしたしまれけり
はかなき魚にさへ別れのをしまれて、

いまよりはたれをよすか（さ）かにふる池の魚の心や淋しかるらむ

など、きのふけふならの別さすかをしむ。暮頃大坂表順作より書状無滞到着。今廿二日御役宅受取相済由申来る。大坂道中此ほどの度くの雨にて生駒山あたり道筋大にあれ、馬なと越かたく専ら道普請の由なから甚人足難義の由、此事はまへより承りたりしかば、荷物の事にて用人共も心配いたししか、まつけがなく相越たる由、安心也。おのれ等通行も定し人足難義とをし斗る。東海道辺の人足と違、皆百性にて力もなければ、一入こまる成へ

し。とんほ持の長持などは通行むつかしくと申事也。しかし有かたき事にはおのれ等の通行に付、道普請等領主へ夫く与力より通達等有てさわきの由、恐入たる事也。花井りつ助、此節は日参也。

廿三日、雨。七十五度也。冷氣。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。昨日、真悦へ饒別の挨拶旁、別れに百足遣す。つぶれたる眼をみ張、泪落し悦ひたり。

廿四日、晴。七十二度半也。

此御二方様御喜嫌宜一同も無事。今昼より仕出し構と成る。今朝は朝めしことにはやく、跡仕舞火事場のことくして、勝手道具・椀・皿等、仕まふ。前々より片付置たれば、手廻し殊によろし。民蔵よく世話をいたす。せはしき事、俊蔵にまされり。年寄たる印に念入て同じ事をいふ。女共さいそくつけじとおもひて、一人手廻し宜きふ興福院尼より、あま使を以口上丁噂。出立に付、道中慰にと見事の菓子折、隠居花台院より人形細工ものゝ硯蓋などおこせり。貞助、大坂より立帰る。当人、不快よろし。

廿五日、曇。八十度也。夕刻、雨少くふる。

此御二方様御喜嫌御宜一同も無事。さと昨夕より例の頭痛にて打ふす。あすは出立にて大混雑なれと、やまひにはせん方なく、よしよ一日の旅なれば、寐て行へしと心納めていたるに、天のたすけ給ふにや、七つ頃よりやゝおこたりて少しよろしければ、先髪ゆひ湯あみす。我も人も悦ぶ。夕方、別れに庭にいてゝありく。さすがに六

とせなれし春秋を思へはかなし。

この秋は鹿よりさきにねをそなくなれてはをしきならの別れに

はなに遊び紅葉にめてし春日山をしく別れに向ふけふかな

人にむかふこと木草にもものいふも哀にをかし。寿美より誠一に言伝へて一首ををこせり。難波に渡り給ふになと書て、

いてわれも御供とまうせ君か行難波の浦の秋のよの月

とあり。口とくいひたる、この男の例の調へ也。病ひにふしむたれば、返しなし。勝南院来る。けふはいとまごなれば、何となく打しめりて、かたみに言葉すくなし。(欄外)勝南院いふ。明日、御見送つかふまつるへきなれと、中く心にくるしければ、まゐらすと申。こなたも夫にてうれしと断を申たり。我も女共も別のをしきはこの人にとゝめたり。涙落して物なといふに、大法師も涙くみて、御いとま申さじ、かならず来春は難波にまゐりてまみえむ、しはしの御別れなりといひて、暇乞もいひあへず帰りき。日暮て、葉廿ふく、おこせり。

廿六日、晴。けふは寒暖不斗。

今曉七時半時、供揃にて六ツ時過、明り引けにてなら御役宅引払ひ、一同大坂表へ出立いたす。(欄外)三人の主人に中小性一人なれば、さしつかへに付、道中供たけ、花井父子、権五郎やとひなり。其外、用人共の若とう・やり持など、出入の町人宗吉等我かちに頼。夫々役割供いたす。此度の供はやとひ多、公家衆に似たり。おのれの乗物わきに花井りう助、同為四郎、同心虎弥太、悴権五郎、御隠居様には誠一郎、八助等也。民蔵初、家内下女までも一同故、かこの人数よ程続たり。しきたりとして、けやき御門内に与力十人出居、引続同心不残平伏

也。黒門内には郷同心不残平伏いたし居る。丁噂の事共也。民蔵引残り、当番与力へ御役宅引渡し無滞相済、跡より追つく。三条通りはづれに郷宿十七人出居。其外何ものやら道に手札出す人々いと多し。尼ヶ辻迄送る人々、佐々木、りうけい、門番後家、りう助妻娘、別当小僧母子、なら女しま、出入町人共不残、誠に賑々敷送り、めつらしき事と人々いふ。行手をいそげは心あわたしくして、そこくく別れをつぐ。さすかにをしき物にて言葉もなし。盃はもとより茶さへ出しかめる混さつ故、いさゝかつゝもく録やる。爰を立て行くおもひつゝ、

幾度かをしむ心に三かさ山そかひになして別れゆくかな

乗物のうちなれば、かへりみることもかなはぬなり。きのふの雨にて道すから塵も立す、道いとよし。遠方は霧こめてみえず。朝出立、涼しく行く追分にて小休。それより小瀬村、橋もとやといふに休む。此茶屋より生駒山峠まで、間ちかう見渡す気色、得もいはれず。庭のものゝやつにみゆる。絵にそ写さまほしきなり。いつまでもやすらひ見てましけれと、峠まで昼まへにいたらすは難波につくは日暮ぬへしと、人々にいそかれて爰を立す。すべて追分のまへより小瀬村にいたるまでも、道は段々登り来て、いさゝかつゝ峠も二つ三つあり。すべてせはき山みちにて、実に此程の雨風に大木をれ、土なとくえたる所々、つくろひなとして有。雨ふらはいかに、人足の労おもひやる。幸ひにけふは天気宜、たゝ暑さ斗也。行くくらかり峠にさしかゝる。箱根のこと、くり石などの道にはあらねと、いかにも登り行事、限りなくおほゆ。乗物なれば、よくもみえねと、かけ路廻る所にて、ひんかしの方をみれば、春日山いとへたゝりて、おほろにみゆる。ならにて生駒山を見ることなり。すへて右手は仰みるはかりの山、左は谷のことなれと、ことくくつちひらけて田畑なり。棚田のいな青く、ま事にひいな棚に似たり。きわくと生立る畑ものは、さかやきの跡に通ひたり。松の林・杉の林など行くめもおよはず。くらかりの峠にいたるあたりはことに登る。されと名には似す、東の方打はれて遠くもちかくも山々見渡すに、

小瀬村の茶やより見えたるは此わたりならむと見おろす。七まがりとかいふなれと、こゝしくはあらず、つきくゝに廻り登る。おのれらか外にも往来の人もみゆ。

くらかりは唯名のみにて治れる御代の光に安き山みち

など、つたなき言の葉にいふもいとをろかなりや。峠の茶やにいたり、爰にて昼かれいす。ならより送りの町人共別れを造るも有。また難波までゆく人々には、喜三郎、源七、肴定、利助、宗吉、八百平助、豆ふ子僧、青物や何某、かゝや代など也。ことにおとろきたるは、あんま真悦此峠まで送り来たり、もう人のいかにしてと皆々あされたり。誠に名残りをしむ余りに来たる成へし、哀成事と泪さへおちぬ。手引などたのみ来たらむとおもへは不便也。用人共へも其心してもく録百疋やる。泪おとして悦ぶ。てうりすかの助、手下のもの七八人召つれ、昨今道々の見分いたし、今日峠まで先立にて送りいたす。例ならず殿様の御高德をしたひてのことなり。別段なれば酒にてものませむとおもへと、下りたる身がらのもの故、おもふにもまかせず。よつて酒代として銭いくらかやらせたり。悦落涙せしときく。凡此度の送り人あまたにて賑々敷事、誠に身に余りたる本意なり。おのれ朝より乗ものにて風少しもいらす、暑さにたえかぬるあまり頭いたくおほゆれば、爰よりくたりの山路少し歩行す。女共も悦、つえなとにてくたる。道に平伏したる人々十人斗居。何ものによとぎけはすがの助初なり。こゝより御暇給る為出居といふ。人の心のあつき程なとおもへは、えしらぬ人にさへ別れのいとをしきなり。りう助道あないにて行。登りくだりといへと、登りはすくなく唯くたりにくたる。道いとけはし。こゝにも七まがりといふ所有。前の七まがりよりことにこゝしく道せはく、のりものなどは通はしとおもふ所も有。このあたりは田畑なとさらになく、またくの山中也。弘法の井といふ所、しみつ有て涼し。あやしき老婆のいて、なにいふならむ、つぶやき居る。女共水のむも有。こゝをこそくらかりといふもむへ成へけれ。木の下をくらくしけりて、ひとり

二たりの旅ならば物心細からむと思ふ。されと所々あやしき茶うる所なともあれば、しいの葉にもる飯、しみつむすひてからく行ほとにはあらし。返々もかしこき御代のみめくみ、かゝる深山にもいたらぬまなし。十三四丁ありきしが、風のいと涼しく、乗ものにははるかにしのきよく覺ゆれと、たゞくたりにくたる道のけはしく、足のとゞまらず。きのふまで絶食にいたれはいさゝかつかれもおほゆるに、しひて歩み、また頭いたくならはいかにせむとおもひて、山路二丁斗残して乗、野方村といふに休、爰にて人足つぐ。ならの人足帰る。なにとなく哀にかなし。こゝらはや難波の東とみえ、村々役人共追々出、案内す。みくりや村名主何かしにて休。夫より大坂二軒茶やに休、爰にて皆々着替等いたす。せはき茶や大混さついはむ方なし。この茶やにてならの方をみれば、生駒山にへたてられておも影も見えず。

生駒根に今はへたて、春日山影たに見えぬ余浪をそしたふ

こゝをいて、玉造りにかゝり、夫より市中何といふ町にや、半道斗行は東御役宅也。御裏門より入、奥庭口より入、すぐに座敷へ乗物付る。与力同心并に町人共など出迎等一切なし。大に心安し。順作父子御門前に出迎、庭内に順作妻まち請てかれ是世話す。御二方様御喜嫌にて、おのれも家来一同末々に至るまで無滞到着、大安心いたす。七つ半時の着也。今少しおくれは市中通行も見くるしからむを、日もいまた入ぬ内着たれは大に都合よし。順作かまへにて座敷向そうし、床かさり等念入、湯遣ひなど済、御二方様初一同わさと御酒祝ひ、はしめて今宵は安く枕とる。此ほとより山路の道あしくて馬の足もたゞず、あけ荷なども皆人足かたにて越、おもき長持などはいかにしてかの峠越来にけむと、おもひやるさへ心くるしかりしか、荷物皆ことなくて着たりときく。見てもおそろしかりし数のおも荷なりしが、人の力はおろしきもの也。しかしこれもみな公の御光りなりと、いと有かたき事也。

廿七日、晴。八十七度、昼より九十度也。

此御二方様御喜嫌よく、御旅勞も不被為有、一同も無事。此御役宅かねて御手広の由きたりしことく、南都の御役宅などより御りつは也。されと奥向はこまやかに間数あれと、打ひらけて広くとはせず。尤勝手は至極宜用場など数ヶ所有。御隠宅御住居、御見立御意に入、安心也。南北明け風通りよろし。尤片寄なれば御都合よろし。奥は南向なれと北ふさかり故、風通らず、あつし。それに残暑強く成しにや、ならより暑さきひしく、風なく、夜は蚊も多く、おもひきや、ならの御庭の風恋しなと女共いふも有ぞ、をかし。柴田の御子様御手習すきにや、障子かべなとまで墨のつきたる事おひたし。畳などぬきかへにて、きれいにはあらず。中々に心安くよろし。けふは少しつゝ勝手の道具荷物あける。御いん宅は相かはらず御手廻しよろしく皆御出し、柵よ、くきよ、と父上御みつから御世話にてあらまし整ふ。奥はゆるくと追々に出す。江戸へ状出す。日記は出さず。重便の積也。きのふ送り來たるならの出入町人共、不残けふはまづいとま遣すに付、夫々もく録等遣す由、用人共色々心配取斗ふ。りう助父子、権五郎等へも夫々遣す。尤銘々勝手に旅宿取、心々に市中見物するよしなり。表方用人には色々御用向手数も有之由なれと、奥は物しつかにて唯追々荷物明斗也。

廿八日、晴。八十七度也。昼九十度に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。川上金吾助様より御家來使にてきつとなく、おのれ等着の御悦有。けふ御表御座敷向拝見いたす。奥と違、御手広くことに御りつは也。御間数等多く、大書院と申所はよと川を前に見なしたる庭など余程よろしく御りつはにて、且御風流也。詰所くなど広く、成程御そうじ斗も御家來多くなくては叶はしとおもはる。御表にくらへは、奥は庭も住居も手せまなり。御馬場、御弓場、其外御けいこ場、夫々有之。

御さしつかへ有ましくとおもふ。けふ庭番のもの御目見をと用人申。これは御代々しきたりとかいふ。兩人庭先へ出たり。吾人は年寄、吾人若し。いつれも庭そふし位の人品也。庭番式人は大そふらしく聞ゆれと、奥庭はわつか江戸やしき庭程なれば数にもあらねと、御表向の御庭、御馬場、御けいこ場などよ程手広故、成程番人式人は多からずとおもふ。大坂は水致てわるし。のみ水にならず。幸ひ爰には外庭に名水の井有て、水ことによろし。のみ水だけは夫をくまず。そふ水はこして用ゆ。洗ものなど赤く成。なら恋しと女共いふ。物干所もせまく、すへて江戸やしき位也。御二方様御身に御こまりと恐察。色々御きうくつの事共申上に成たれば、御当惑なり。されとまつ此節は御荷物置所など御かんかへ、御紛れなり。物見は内々より通ひ出来るよしなれば大に宜く、少し居合のうへ、御出可然と申上たり。けふ迄は日々仕出しの御地走なれば少しは真、明日より、いも・なす成へし。かゝや助蔵留守中より色々心付別段にて、立前老婆など用人方へも来り、用向き聞、道具など借用いたし都合よろし。

廿九日、晴。八十七度。昼九十度也。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。長や家内共一同着、悦に来る。栄も旅労もなく喜嫌よろし。健その外も無事也。長や皆窓あれば、めつらしかる。犬などをみてめつらしかる由、なら子也。南都を立て、こゝにきたり、今日にて四日すくれと、いまた夢の心ちにて、両三日は江戸の事を思ふ事すくなし。されと無滞南都を引払ひ安心したる事、悦限りなし。心のおち付たるにや、此地へ来ては夜るもよくねむる也。まつ気分もよろし。花井りう助来る。明朝出立、暇乞す。市中所々見物いたしたるよし。よと川の舟遊ひなことにめつらしかり、手まねにて咄す。両国あたりのやうつす也。

廿九日、晴。八十三度也。

御二方様御喜嫌御宜一同も無事。追々荷物も明たり。江戸より来たると違ひ、持来品も多ければ、さして新調のものもなければ、切々勝手道具あらく、敷物は、矢張新調也。乍去、大方は持込しかは、大に助りたりと用人共いふ。凡こたひ南都引弘井に此地へ着にて、色々御入用懸候事共、御留守の事故、用人共心配のやうす察候。人々へ遣す物など一応はおのれへも其節々申きける也。されときく斗、存寄いはす。この御役宅、奥は庭至てせまく、ならよりのめうつしには江戸やしき位とおもふ。築地外はすぐに下々の大部屋めきたる所のみえて、折々小歌なとうたふ声す。月花をたのしむ世かには無之。追々なら恋しと人々いふへし。おのれなどはいまよりはや忍はるゝ事多くて、夕つかた、

いま頃やさかり成らむならの秋花の色々むしの声く

八月朔日、八十二度也。昼より九十度に上る。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。八朔を祝ふ。けふは江戸にても御揃被遊、御喜嫌よく御祝を思ふ。此程より御便間遠、日々待。母上の御不快も心に懸る處、表方より今朝御用便有ときく。日記頼み出す。けふ八朔に付、表は御礼に参るもの有由、何村とかいゝき、忘れたり。八朔御祝義に付、蓮根十本出す。長さ壱間に余るへし。見事成こと珍らし。殿様へ上兼残念なり。夕方料理たへる。風味ことに宜。けふ始めて物見へ参る。南向長屋の続にて、庭続にて参るゝ。御城を筋違に見、まへはばんばの原と申所也。人通りすくなく淋しき所也。物見もりつはにて十疊斗也。しかし暑さにて御いん宅様も一度御出にて、こりく被遊、大笑也。寿美より順作まで文通

にておのれへ菓子と歌をおこせり。川路のうち君の難波にわたらせ給ふになと書て、

入をのみをしみなれにし伊駒山月まつ峯とけふよりは見む

はるく〜と峠を越ておこせし心さしいとふかし。おのれに立まへに短尺十枚斗書てよといひおこせしか、こゝちわつらはしと断ていまたやらす。いときのとくなりと思ふ。折からまたかくとはれて、いと心くるしき也。爰はならと違、生肴あたらしく、あたへも御奉行直段と申ながら、江戸よりも下直也。其外なに事も不自由なし。江戸風のやうし、たほさし、お六くし、にしき絵なとも自由也。

二日、晴。八十二度也。昼より九十度に成。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。此地残暑つよく昼は日々九十度のうへ也。大坂は川風涼しとぎくに案外也。所のものいふ。例年かくはなし、今年はきひしくあつし。米よく出来ると悦ぶ由。されはよ、おのれも此程道中山城大和のあたりはさらなり、生駒山こなたもよもの田畑をみるに、いつこも〜豊作に見えたり。ことしは世の中のとかに成て、殿様こゝに参りそめ給ふに、いとめてたきことよと、数ならねと思ひつゝけき。此程道中生駒山越はさらなり、大坂市中へ入ても人々に見られし事、誠におもなきやうなり。途中人をはらひ、村には村役人、市中には町役人先立候て、下には不申候得共、どふか人を留候やうすにて一向人通り無之、横丁に溜り居候様にみえ候。有かたき事也。市中は江戸のみせ〜のやうにて、賑やかにみえき。もはや御役宅へ入り候は、帰府まで門外は出来ぬ事故、能目と〜めて見たるも、我ながら今おもへはをかし。爰に來たりてはす〜めさへみす。鳥はいと多く、朝夕鳴声江戸にまさりけり。

おもしろきならの小鳥に引かへて難波鳥の声そかしまし

お城にねくらするとかきく。やみのよ中もなく声す。

やみの夜の鳥はうたて寢覺してしか(の)ねきしならそこひしき

○三日、晴。八十三度也。昼九十三度に成る。

御二方様御喜嫌御宜一同も無事。此頃少し心落めて夕方庭などよくみるに、奈良のめ写しにていとせはく思ひしか、よくみれば江戸よりよ程広し。殿様表御居間と続たれば歩行所よ程有。まへせはく長屋にふさかれたれば、はれやかならねと、木草植こみ石の居やうなと、すへて茶かゝりにて風流也。跡部の代にとかきく、梅百本植られし由、内庭にも外庭にも梅いと多し。難波の名に寄しにや。桜もよ程あり。桃柿なども多みゆ。草は萩などあなたこなたに有。池はなし。楓はすくなし。松はうゑ込に有。作りもの也。畑などはなし。一尺の明地もあらねは、ことはり也。土蔵は広くりつは也。いかなる道具も十分に置所有、すへて不自由なし。女共いふ、これ日々庭番入らすは心遣ひなくよからむといふ故、おのれいふ、さらは庭そふし女共にせよ、水まけなといは、さはこまる成らむといへは、皆笑ひぬ。庭番も朝夕斗なればさしてこまらず。朝四つ時過、江戸より遠状到来。御書御日記等来る。御一同様宜御喜嫌よく、母上にも御不快御快恐悦。御書不相替御懇なる事共身に余、有かたき事也。御日記中種々御細やかな事のありかたく、拝顔の心にて幾度もみる。今に御客来絶間なきよし、御休足もなく御勞と御噂いたす。段々御立の近寄、月日はやく、母上御日数御かそへ被遊候由、いとく御ことわりと恐察。爰もとの為にははやかれとおもはぬにもあらず候へとも、母上の心中恐察いたし候へは、一日もおそく御立あらせられ候へかしくおもふ。あやにくに秋の日のみしかく成も、日数早ふ立やうに思召候はむと思ふ。御日記中色々おかしき事共、歎息の事共に御さ候。茂兵衛後家若きよし、一同大笑いたし候。昨日西国高橋様へ民蔵

より書状いたさせ、廿六日引越候事申上候。尤民蔵存付候。御留守中御取しまりの事まへく御沙汰も有之、其善ながら民蔵・順作初一同申合行届候様に存候。兩人とも心配、出精相勤、安心いたし候。

四日、晴。八十四度也。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。昨日の御便にも江戸残暑強き由、雷鳴強数ヶ所落候由、絵図御みせ、おとろぎ候。此地も残暑きひしく勝かね候。雨一向無之、日々雲立斗なり。此住居の軒裏には、ちひさきはり札有事おひたし。皆、板倉内膳正と書たるの也。何故と作事方のものにとへは、虫よけに此地にては皆はる也といふ。かのほうじやう虫とかを除る成へし。実は大坂にひきし英勇士の名なれば、左も有なむ。虫さへ恐かゝれば、人におゐてをや。殿様御表の御居間の御後の庭に、大野道軒のうち死の時、腰掛て腹切しといふ石有。これにさはれはかならずたとて板かこひ有。此屋敷はいにしへ大野の屋敷跡也といふ。

八月五日。八十三度也。昼より八十九度に成。日々晴、暑強。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。けふ民蔵・順作より到来の由、肴くれる。此節、与助不辰、料理不自由なり。大坂抱の小遣ひ、江戸ものゝやうにて肴なところしらへる故、頼む。喜三郎南都へかへるに付、不足無もの故もく録は不遣。たに尺掛に殿様御短尺、自のも一首取添遣す。誠に大悦。家の重宝長く子孫へ伝へむと、順作に箱書杯頼み、荷物は飛脚に出して、やりし品は老人せをひて出立したるよし也。

六日、晴。八十二度也。八十九度に成る。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。昨夕奈良寿よしより春日野の松虫・鈴虫、籠に入、歌を添ておこす。

松風かそれかあらぬかとはかりにすゝてふ虫もふり出にけり

など有。いさゝか心得かたうひとり寿。此翁しきりになつかしきや、こひしきや、おのれこゝへ来てはや忒たひも飛脚をもてとぶ。あまり気のとく故、せめて返事斗も遣せよと順作へ申付る。今朝、源七南都へかへる。別れに先頃もめん二反くれたれば、挨拶かたく短尺かけ一箱遣す。殿様御よみ歌添てとおもへと、あやにく御よみ置によるしきのなし。長くたからといたすなればよき御歌可然とおもひ、後よりやらむといひおきたり。大に悦ひさゝけかへる由。

七日、晴。八十四度也。夕方八十九度也。雨、少々ふる。

御二方様御喜嫌御宜一同も無事。日々雲立斗にて雨なく、残暑きひしく御隠宅などには一人御しのきかねと被仰。御尤也。少しも御しよさいなし。ならば庭にてもあれ共、爰にはありく程の庭もなし、みる山もなし。長き日曇斗なれば御退屈の筈也。されと御酒は矢張、夜六つ頃よりはしまり、五つ時頃迄召上り、すぐに御寐に成也。毎度申す事ながら、夕かたはやく上り候は、ひるの少しは御紛にもならむといへと、夫は御いやと被仰、たゞ日のくるゝを御待の御やうす也。何ぞ御紛に遊はす事有度と色々おもへと、おもふに不任。ならの寿よしかりより、おこせし虫を見て、

あな哀人たにわひしいこま山いかさまにして虫は越けむ

はるくと春日の野へのむしの音を難波にきくも人の情や

こに入ておくはあはれなれば、庭にはなつ。いさゝかの芝山なれと、うれしけになく。

八日、晴。八十五度也。昼より八十八度半成。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。御隠宅様あまり御退屈がり被遊候に付、夕方庭方のものも引たれば、馬場より築山のあたり御同道にて行。淀川まへに見て天満橋目の下なり。行かふ舟なとよく見えて気色よし。されとやふ蚊多くてやすらひかたく、しはしにてかへる。人氣さらになし。よき所也。されとも御留守中故みたりにはまゐらず。今日はしめて也。栄・きん・留など遊びに来る。健は途中こはしとて来らず。寿美よりおこせし虫、芝生にはなちてより夜々しきりになくを、

ふる郷を汝もこひなくか春日野を忍ふはわれも同じ心ぞ
家居の建つゝきて打晴ては空なともみえず。

朝夕になれしみかさの山恋しへたつ伊駒の山なくもかな
といふ生駒山さへもみえず。ならにて夕月をみるは、いこま山のものとおもひしか、爰に来ては、

いこま根の山の端にけてみか月も所かえてそ見る難波には
庭の向には大日やなり。朝夕人の声す。きのふなとは何事が口いさかひなとして、久しふりにて江戸めきおそろしと思ひしか、程なくしつまる。そうかましとおのれはいとへと、御隠宅には江戸めきて大によろし、心なくさむと被仰。幸ひの事也。

九日、晴。八十四度也。昼より八十八度半に成。

御二方様御喜嫌よく一同無事。昨令、長崎奉行此地に御逗留の由、御荷物なと爰にて御調なと有。御先例の由也。田口に勤候もの此度の長崎奉行の御中小性とかにて参りし由、貞助しる人にて、参り違候て殿様の御噂申上。御登坂は有まじ。直に御勘定奉行なりと専ら御評伴（まへ）也といひし由。貞助などは青く成る。父上、其咄し御きゝ大に御悦。とふそ左なれかしと珍御祈也。尤此市中にても其御評伴申もの多き由也。大坂は不自由なく、凡のかい物まつやすき方ながら、砂糖至て高し。いか成故か。

十日、晴。八十二度也。今日はめつらしく風涼しく、昼より八十五度也。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。お時・建之丞来る。ならと違ひいつ方の家内共も一向来らす。めつらしくなつかしき様に思ふ。西国高橋様より御自書添、御短刀一、唐もめん一反来る。御書は御便次第差上る積。御二品は御預り。母上御退屈に付、借本や申付みるに、本やのあしきにや、土地になきのか、借本は一向に江戸ものなし。歎息也。何卒、京山草紙御ととのへ御登坂可被遊候様に。江戸にては妙見様御祭と思ひやる。

十一日、晴、曇。八十一度也。昼より八十六度に成る。

御二方様御喜嫌御宜一同も無事。大坂は時候よろしく、当年は豊作とて皆悦ぶ。米直段も追々下落。今に百匁内に成へしといふ。用人共、一日置二日置位に、西さまへ参る由。道すからいと賑はしく、江戸めくなどかたるをきゝても、おのれ等はまた旅のこゝちして、

すみよしの名は有なから難波かたまた住なれぬ家居侘しさ（せ）

たゝ江戸こひしくて思ふ事多し。

古郷のたよりやあると大空をなかめてはまつ雁の玉つさ

小切なと入用に付、出入用き、いはき升やより取よせみるに、案外に品すくなく、直段はならの柳屋位也。江戸店よりよ程高し。

十二日、晴。八十四度也。昼より八十九度に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。大坂はずしもよろし。江戸風のも有由なれと、いまたくわす。切すしをきのふ御隠居にて御調、御地走に成たり。けふ、そはを取、御隠宅へ上る。ならの黒そはよりはよろし。しかし、うどんかちにて、殿様などには御上りにならすと思ふ。上方は、そはは思ひ絶たり。高橋様より御到来の御短刀、貞助へみせたるに、宜き御品のよし故、もし御こしらへ等も可被遊哉と、今日並便にてさし出す。尤、外にも表より出すもの有由、序かたく也。南都喜久左衛門より用人共へ書状もて、おのれ大坂着の悦申来る。書添に御在勤中、殿様御懇命蒙りし御礼なと細かに申来る。此頃毎夜、月よくはれる。十五夜もはれなむと嬉しく待。

十三日、晴。八十度也。少し冷し。昼より八十五度に成。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。内藤左衛門さまより、おのれ大坂引移の御悦状来る由、用人申す。あしたはおのれか無父の十三回に当る。年月のいとはやく夢のこゝちす。いつとても恋しからすはなれと、いとゞきのふけふ懐旧多し。

十あまり三とせの秋のいにしへを忍ぶ袂そいとゞ露けき

心にはふかくおもへと旅なれは露の手向もことそきてけり

いにしへを忍ぶもかなしふかゝりし庭のをしへの露のくさく

はらからやまふてまつらむむさしのゝみはかあたりを忍ぶけふかな

いまた殿様御登坂まへなれば、施しに家来などへ物くはずも心よからすおもへは、たゞ心斗に茶飯の豊供、手向たり。月をみて、

なき人のかげ忍ばれてすむ月も我は涙にかきくもりけり

此御役宅はならと違ひ、月も家より出て家に入やうにて、風流なし。ことに奥は座敷向あしく、月見はおもひ絶たりしか、庭先へ茶座敷一軒有。三疊斗にて、柵、袋戸有。雨戸もまたあけす置しか、ふと夜る庭ありきて其所をあけるに、月みるにいとよし。殿様御登坂有ても、月見る所なく本意なく思ひしに、この所見出していと嬉しく、ひらひものせし心ちするもをかし。

十五日、晴。八十四度也。昼より八十八度に成る。

此御二方様御喜嫌御宜一同も無事。乍去今暁より母上例の御むねつかへ、御はき氣、御くたりも有て御難義也。尤去年、此春も折ふしあらせ(ら)れし御容体なれば、其御手当いたす。御足こしたゝぬ程には不被為有、よ程御かろし。しかし、御老体と申、御留守中故、おのれ初心配なれば、早々出入のいしよひつかゝはせたり。一体の御様子など、よくはなしきかせたり。いし申には、御時候当りにて、御持まへ御症御うこき也といふ。尤成申上分也。矢張、召上りもの御こなれあしくと申、勝南院の申に不替、外の御様体に無之、先安心也。御薬、小桂・白実散・半夏などと申す。宇佐見左門と申しし也。年はいも五十斗にみえる。和らかそふ成御薬也。此ほとより江戸御便り待侘たりしか、今朝四つ時頃、江戸より八月八日出御状到来。御一同様御喜嫌よき奉伺恐悦、先

安心いたす。母上より御細書、乍例有かたく幾度も拝見。殿様よりも御書御日記共、御委敷仰のこと共、くり返し拝見。有かたき事共也。久々御たよりなきやうにて、いか斗か案事奉りしか、ことなき御状にて大に安心也。御日記は誠に御物語よりも御委しく、何寄のたのしみに、みるもきくもかなしくもをかしくも、さまく也。いまに御客来たえず、母上と御もの語の御ひますらなき由、其内に月日過、母上御心中恐察いたし候。殿様も御心くるしくこれ亦恐察也。大越兄度く上り、何角御懇命蒙り、御憐厚き御事共、切々今に不始難有事、落涙の外申さむやうもなし。耳遠にて不都合外候へは参らぬ方宜く、心添いたすへくとの仰、御尤千万。おのれも夫を常におもへと、子をおもふやみにくらかり候心より実に愚なる事共、かへつて貞五郎の為にあしく、程よくおのれより申やりなむ。其御許へ参上さへ、於貞、切々心くるしく恐入たる事也。佐々木のけつかふ、御同然御悦申。御師匠番も御張合有て御満足ならむ。御はやき御昇進にて人目さましの由、理り也。松月さまの事、其母上御身につき、御噂有由。最初は江戸御残りの積の所、南都風流の古跡などの有事御き、また御附添御出の由、御尤。しかし、また西村に御別れと成、矢張二筋に御まよひと察す。其母上とよく通ひたる御身也。御隠宅御二方様、新家の為に御信心可被遊との仰、御ことほりに奉伺、落涙いたす。何卒、此度の御きりにも、以後御つゝしみ有へくと思ふ。此御二方様大に御歎息にて、殿様へ厚猶御頼申くれよとて、日もくれく被仰、御尤也。阿波守さま御不快。御六ヶ敷よし、御いとをし。しかし、御孫御番入済、せめての御安心ならむ。太郎、おのれか文をよくよみしまひおく由、いと嬉しき事也。新右衛門様其外御親族御打寄にて折ふしの御物語、母上御側にて文字御認などの事、切々何寄御たのしみと承も嬉しく思ふ。其外、くさく御記の事御つはらにて、ことくく拝見いたす。御客来にて御いとまもあらせ(られましに、かく御しるしは、大方ならぬ御事成。愚には見るへからす。爰もとの事思召は、ならにて江戸の事おもひ給ひしに替はらすとの御仰、いと忝し。まち侘たる御文をみて、む

ねもやゝ落ぬ。

たより有てまつ嬉しきはむさしのもことなし草の言の葉をきく
あなたかなたよりの文共もとりにくに見て、

旅にゐてひとりすさひはふる郷のふみみる斗たのしきはなし

母上夕刻に至、御かゆ上り、御惣体御落付御宜。今宵十五夜にて、例の通り御三方様へ御酒御吸物上る。なれ共、
母上は上らす。よつて淋しく当番順作よひて御相手也。月はあやにく曇てあかすくちをしき今宵の影なり。

心なくと影もる難波江にうつりて見むと思ひしよ月

されと影を愛給ふ家あるしのまたおはさねは、

のほり来むあるしを月も待顔に晴ては我に見せぬなるらむ

この頃、爰の市中にていふをきけは、

出かての月につけても浪花人やかてと君をまつといふなり

今宵は江戸にてめつらしく御月見。御打揃おはして、御みきまらむ。みさかなは松の魚か。

この秋はまとゐたのしく武蔵のゝ月のひかりをめて遊ぶらむ

たんこ・いもなど、市三郎例のことく悦び、いかにくうならむと、浪花にてたんこ物したるをみて、おもふ心
を、

おやいもにこいもまじりの月見してまるきまとゐのいかにたのしき
いとされたりとにくむ入し。

十六日、雨。よへより冷氣、七十五度也。およそ三十日めて雨降。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。母上今朝は一段御快よし。左門も罷出診、御熱も覺たりと云。一兩日之内には御全快ならむ。御かゆ二つ位つゝ上る。とかく御ふとり強き故あしくといしいふ。おのれはまたやせてこまる也。花井りう助より春日野の虫色々籠に入ておこせり。おのれは此秋は物いみなれば、この虫はかはす、母上御慰に上る。なく声ことによるし。ならの庭を一入に忍ふ也。りう助度々源助と尋こす。常三も有。また身分の心願もいたしおくなれば、ことわりなり。さかなやり助、別当子僧其外出入の人々より折々尋状おこすもの多し。

十七日、折々雨。七十二度。冷氣にて羽織なと着る。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。母上、左門診ふ。御時候当ははや御宜、御熱もなし、御張立斗と申す。乍去例御容子にてとかく御腹のこりいまた落付す。御通しわなしと被仰る。御丸薬上る。常に三の湯上る事をいしにも咄し置。御老体故大黃は如何なといふ故、尤ながら常上る事ははなしおく也。以後心得にも成へしと。母上二日御床に入らせらるゝ。父上御歎息にて例の御小言出る。おのれか病身の事、殿様の御当惑の事共、御はなし御いさめ申上る。年の寄は情なしと被仰るなれと、かの老若の歌の論を存出し、とにもかくにも若き身そつきならむ、順作妻そめなとも有世中也、今まで御丈ふこそ御高德なれと申上る。御なま返事也。奈良の梅木といふ神主より虫色々籠に入おのれにおこす。今夕江戸状出す。高橋様御状さし上る。

八月十八日、晴。七十三度。朝なと袷着用。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。母上御不快、今日はまた御快。左門診ふ。御宜段申上る。勝南院と違、浪花のいしは皆かこにてありく也。まだなしみなければ、日々の見舞も女とも猫じやらしの帯にても出られすと心配

いたす。夫に西御奉行などは女中拾人の由。上は御夫婦斗の由ながら、御高の故ならむ。髪は皆片はずしと申事也。尤中野などにも女中は皆片はつしの由。長家家来妻などまでかいどりにて御礼に出たりし由うけ給る。御りつは好きの御風故御尤也。中く川路などには片はつしはもとよりおよひなき事なれば、せず共よし。せめてかつくり返しはいたさぬかよろし。おひもねこじやらしまては御免。間男結ひは異名いやしければ禁すへしといひて笑ひたり。すへてしつぽくに暮すはよろしけれと、あまりいやしけなる事は心附たき物とおもふ。日々出入のこふくや、したてやなと家中へ御用伺に参り、酒や肴やなとも同様の由なれといつ方にては御用なし。これ迄の家来は登坂早々色々入用物拵などしたるが多けれと、此方のは一向夫なし。町人もあきれる成へし。奥にても日々の給物の外は何もめさましき用向なし。夫故一入殿様の御登坂をはやくと人々待由也。江戸にては当秋は撫子たね御まき遊はされ候や。此地にてもならより持来たるたねを十五夜にまきたり。其折からおもひつゝくゑせ歌、

やまとにてなてし子もかくすくせあれはたねを浪花に来てかへすかな
たなまくをかへすとはいはぬや。覚束なしや。

ことしより花の難波にたなまきて生立めてむ大和なてしこ
夕刻より雨。ことしの秋はあやにく月に村雲也。

十九日、曇。七十八度也。

此御二方様御喜嫌よく母上も御同扁の内御快方一同も無事也。爰の庭にも萩薄少しつゝあり、此頃咲初る。奈良にては数の萩薄ありて盛の頃は、とりくの色にて鹿などの遊ひたるさまなどは、誠にうつつし絵のやうに有き。

夫におもひくらへは愛の庭など数にもあらず。木草の植やう石の居さまなど、たゞきわく敷しなして、あはれみ所すくなしとおもひおとす。

いにしへのおもかけありきならの里は庭も軒はもさすかみやひに

なにはかた名には高きもおもはずにふりにし奈良をなと忍ぶ我

けふ夕刻忠四郎より別便書状来る。例の事なれと、まつむねさわくも旅の常也。とくく文みるに何事もなし、おのれこゝに引移たる悦なからに尋おこす。外にいさゝか用事も有。かつ市三郎養子の相談世話する由申おこす。いかにやこの男斗にては如何と氣遣ひしか、小笠原もともに世話人のよしなれば、安心よければ整へかしと祈る。且また忠四郎文に、此秋大坂御目付代に土方八十郎登坂いたす。出立まへに逢たるに、川路氏大坂へ御出故大に都合宜、また御世話に成事も有へし、宜頼むなといはれたり。婦も罷在、養方弟もをれば、御役辺はなれ御用もあらは仰られ可然と申たり。昔は養父の恩ある人の末也。今はまたたのまるゝ、移り変世中感歎述懐しておこす。おのれがかく幸ひの身をつゝしめかしのいさめならむ。

廿日、晴。八十一度也。よほと冷氣に成たり。

此御二方様御喜嫌よく、猶母上御不快も御宜。左門診ふ。はや明日は御床上にて御宜と申也。きのふ南都喜久左衛門より用人へ手紙にて、春日野の虫二籠到来。夜に入、なく声一段に宜。心を用ひおこせしものならむ。難波にきて春日野の虫をしはくもろう。中くに奈良に住ても、かく春日の虫をいろくあつめてきく事はいとかたし。いにしへのあて人はさか野の秋を庭にうつし、あるは宇治の虫を庭にはなち、ゐなからにして名所に遊ひしとかきく。いとをこがましけれと、おのれもいにしへまなふともなくて、はるくとかくはからずも人のお

こせたる虫を庭にはなちてきく。広からぬ芝生なれば中く遠くにけもせず、母屋ちかうなく。とりくのこ
系なり。

おもしろき虫の色音や春日野をこゝにつつせるこゝちせられて

なつかしくかつはかなしくさまくにおもひ乱れてきくむしの声

高橋様より御状来る。

廿一日、曇。七十七度也。夕より雨ふる。冷氣。

此御二方様御喜嫌よく、母上今日御床上る。一同も無事。高橋様へきのふの御返事状出す。忠四郎へ一昨日の返
事出す。けふは大師系ん日にて物見下も人通り有とききは、父上母上御慰に御出申上る。おのれは参らす。不快
にもあらねと此頃はた織虫の声いそしくなれば、冬衣のまふけに心いれて参らぬ也。

廿二日、雨。七十一度。冷氣也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。此地は雨降故か俄に冷氣に移る。江戸は如何にやとおもふ。御登坂の段々近
うなるを、たれくも待奉ることわりながら、江戸母上の御別れおもひやり奉れば、いとをししくくるしき限り、
此頃は其事のみおもふ。其御かたくの御心おもひやりまぬらせて、

逢ぬ身をふかくなけかしあひみても後の別れのうきをおもへは

昼頃江戸より八月三日の並便到来。母上より此度おのれ大坂へ移りし御悦とて、御懇書のうへに御帷子給り、外
にも長寿の人より参りし由、しやくしなと給たり。御帷子など誠におもひよらぬ御めくみにて恐入たり。御年に

あやかり奉れとの厚きおほしめしのほど、誠に不淺有難事申中へ尽しやらず。未久に身につけて母上の千歳万代をいはふ心をのみ。

いともあつきめくみの衣君をいはひ我をいはひて万代も着む

返々も有難事になむ有。おくに、市三郎方よりも相かはらず文、嬉しくなつかしくみる。おくによりよき品給り、これまた忝。御一同様御喜嫌よく、何奇恐悦也。御隱宅其外へも御つたへもの夫々届ける。

廿三日、晴。七十二度半也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事也。夕刻南都中条父子より用人共へ當、兼て御頼被仰付候春日つくえ二つ出来にて来る。殊の外うるはしく出来たり。中条何角心尽して、京都までぬりは申付たり。度々直しなどにやりてやうく調ひける由、二重箱・わた入・風呂敷・さなた等、皆兩人より献上の由、夫々此地へおこすにも、家来・若とう、外に春日絵師參。兩人才領にて、大切にいたしおこせし也。よほと物の入也。それにおのれへも古梅團の墨一箱、りつはに台居折あしなどにておこしたり。いつれ御世話の御挨拶等、御心附有むとおもふ。七つ頃、天満辺出火にて、はんせつなとそふくし。庭の山よりよくみゆるとて、御二方も女共もみに行。久しふりにて江戸風の火の手みて、いさきよしといふも有、やける人かわひそふといふも有。なら女はおとろきふるへる。酒やにて、よほと町人の由。半時斗やけたるか、一軒やけといふ。江戸火事に違、足おそし。夜に入、てうちんなど多く、西御奉行御出馬にていと賑はし。殿様も御登坂あらは、かく御出馬あらむ。南都と違ひ火の元用心すへし。

廿四日、雨。七十四度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。母上、左門診ふ。はや御休業にて御宜。一体御大丈ふの御生れ恐悦と申上る。順作妻などとかくまた不快なれと、いしの口切いやとてみせすいたりしか、奥にて口切済たれば、きのふより左門にみせ候よし。よわき女、おのれと同様也。しかし、おのれもそめも、いまたいしには近よらず。江戸より十八日出御状到来。御自書御日記共来る。御一同様御喜嫌よく恐悦也。此度は民蔵初御役替、それく結構被仰付候。御吹聴有難事也。母上よりも不相替御懇書、両人の子等よりも文忝し。御日記くわしく御地の事共承り、嬉しくかつはなつかしき事也。いちくは御請せず。刀屋忠右衛門か詠歌おとろき入。おもしろく土岐公の風にて、きのきたる歌よみ也。町人にめつらしく風流人なり。御返し歌、これまたかん吟奉る。佐久間先生凡人ならぬ事、誠おとろく。人たれも眼有、鼻有、五尺のからたなれとくちをしき物也。母上御すこやかにて、御あし駄かけにて御仏参。御歩行おとろきたり。しかし御用心よろし。江戸は月見よろしきよし、御うら山し。ならと浪花をおほしやり給ひしとの事有難、此地にておもふも心は同じき也。

廿五日、曇。七十三度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事也。よへは雨いたくふりすさひ、物心ほそきに、例の江戸より便有し夜なれば、さまくゝに思ふ事多くて、ねられず。御日記中に有し、太郎・次郎にうなきの折をあてさせられし事、いにしへの板倉の兄弟にやみのよのかみそりのためしににて、御心有きとおもふ。太郎の物におそきも中くたのもしく、次郎のはやきもまたたのもし。

生さきの盛りたのもし二葉より色とりくのちこさくらはな

ひとりしてふたりの孫を右ひたりてふよ花よと君は愛らむ

太郎のケンにまけて、日のへの願いとをかし。かならず御沙汰やみ成へし。きのふ御便に新家より御状参り、御二方様へかた衣の御礼として、御さかな代百足参る。御満足也。とし寄の悦ぶ御事みるたにつれしく思ふ。井上より松魚御到来の由、御日記にする。御つら山し。大坂にも本かつほはなし。まなかつほ多くて、ならよりやし。肴もやすひくといひくかふと、終に高いものに成たる。酒同様也。今夕江戸へ書状出すにつけて、ふとおもひつく愚歌、

此秋はひとり難波の草枕おきふし露のいとわひしき

ふる郷を思ふ心は玉つさにうつりてみえむかゝみならねと

八月廿六日、雨。七十三度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。此節は爰もとも居合て誠に静也。南都と違、なしみなければ、向來る人もなし。

廿七日、雨。七十七度也。

此頃打続雨かちにて、いとつれく也。御二方様御喜嫌よく一同も無事。六月初よりさわきにて、此度は縫ものなど、おのれをはしめ女共もようせす。此頃の冷氣にて、おとろき立て、皆心いれて物す。おのれもめつらしく心地もよければ、日々その事にかゝる。例のふしかちにてと江戸にて御案事も恐みて日記す。

廿八日、曇。七十二度也。よほと冷氣に成、朝は恰のものも有。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。順右衛門留守宅長屋替、用人長やへ移る由、きのふお時、礼に来る。此度の順右衛門結構誠に不存寄とて落涙いたし、有難狩（ま）、付て色々物語など相替らす若きものゝやうに無之、取しまりたる事共、いちくことわりなる事共いふ也。健ほう大悦にて参る。錠口の向長やにて奥へ一番ちかし。爰の庭広からぬに植込木多く、ことに梅あまた有。此節毛虫おひたゝしく付たり。庭方のもの、火にてやく。奈良の毛虫を思ひいてゝ尽せず、なつかし。

もてはやすぬしなきならの梅桜つき虫にのみいとゝすたれむ

さほしかの声の盛りとならの里萩の露にもおもひやるかな

八月の月はあたらしく雨の為に打けたれて、はやあすはつこもりになりぬ。されと中くくに、

雨雲のはれぬもよしやこの秋は月をみ笠の山もなけれは

名に高き三笠山にも別れては月もはえなし曇るも恨みし

「欄外 此 む」

江戸はいかに。廿日の月までもなかも給しや。

廿九日、晴。七十三度也。めつらしく天気。十五日ぶり也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。南都よりそふじ喜三郎来る。此老人おのれ等南都にをる頃は日々来る事、御役の様にて、出立まへは別て色々世話やき、日に二度も来りしか、御奉行所引払後は毎朝二月堂に参りて、ひる寐の外に用事なし。淋しくしよさいにこまり、一入御屋鋪なつかしくとて、いさゝかの用事をかことにして来る、

と女共に物語る。小豆なとくれたり。ならのものを来るを女共なつかしく、皆いて、物かたりす。江戸より南都へかつはやなと来る時と心はおなしき也。南都も替事無。御奥も長や向も御普請、御手入の由也。米直も下落、一升百十三文とかきく。畑ものも出来宜よし、喜三郎咄。

九月朔日、曇。七十二度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。けふは物見へ御二方様御出。おのれも参る。窓下少しづゝ人通り、女なとも通る。はんのははら、霞む斗に見渡す。芝生に日かさをたて、ものづるもの数しられすみゆる。かさのつつきたるさまおひたしく、中の町の女郎の道中か、或は山王祭りの地おとりのつゝきたるやうなり。所は御城の大手まへの芝生也。例の弁当かりの人々もみゆ。相応なる町人の女房、女なとつれて皆あそひ居る。女の風、ならより少しいき也。新造も赤糸りなとはせず、すへてけだしなとも鼠白なと多し。白粉すくなく、ならよりほと墨絵めきたり。隣屋敷は御代官川上なる由、手代の子供にや、女なと付て原へあそひにいたり。江戸の子供は風体一目にてしれる、何となくなつかしきやう也。物見より帰りかけ、山の方へ行て、よと川見渡す。此頃の雨にて水かさまさる。江戸より御たより有頃そ川つかえなくもかなとおもふ。此所よりみれば東北西と山々みゆ。東北は京都のあたり、北より西へかけて播州筋の山々とかきく。一の谷みよ、ひよ取越はあなたといへは、女共あつ盛・くまかえ噂いふ。西はすま明石につゝく。海はみえず。をしき事也。今夕大越より別便六日限来る。替る事無、安心。十八日出、川留めにて遠着也。されはよと川の満水をおもふ。無父の十三回に付、存よらす殿様より御香奠式百足御備有とて、御懇の事共恐入、厚御禮申来る。おのれにおきても有かたく、落涙迄御礼申尽さず。付ても懐旧のみ也。

二日、晴。七十三度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。爰の庭に木犀の木多し。此頃花咲てかをりにことによし。殿様御このみにあれは、さそ御悦ならむとおもふ。匂ひを留来て人々も愛るを、

色もなき梢なりしか時来れば香にあらはれてもてはやすなり

手折てみ仏に手向さゝけ床の当のかめにもさす。よたゝかをりみちて、

いねかての枕なくさむ春の夜の梅におとらぬ香にも有かな

○三日、晴。七十一度也。冷氣追々増る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。けふ御同役本田より御添志をもて、おのれ爰に引移御悦として肴一籠到来いたす。民蔵はしめへ移方遣す。右肴到来の御挨拶等如何いたしよろしからむ。御地うかゝひのうへと、民蔵初へも申置たり。宜御さし図伺たく、且御同役へ御書被進候節、宜御礼被仰進候様に。此頃かつほの代りに例の小まくろしきりに多し。けふ到来の交肴にも小まくろ入たり。しかし新らしければ風味よろし。

○四日、晴。七十度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。夕方はつ雁はつかに声す。

古郷をしきりにおもふたくれの折哀なり初かりの声

初雁よたか玉つさをかけて来しもし古郷の言伝やなき

古郷のたよりもあらむと旅にては初雁かねもいと嬉しき

○五日、晴。七十度也。冷氣、日追て増る。虫の声も哀なる時節也。此御二方様御喜嫌よく一同も無事。喜三郎今に長屋内に逗留。この翁奇妙なる人也。我娘天満の当にすむ由なるに、そこには一寸行たる斗にてとまりもせず、屋敷内にきてとまる。よほとほれこまれたりとみゆ。夕刻江戸より八月廿九日出御状着。此ほとより待侘ていたる。いと嬉し。御一同様御喜嫌よく安心。母上より御懇書、殿様御日記御書共、数々有かたく拜。おくに其外よりも書状とりくみる。御母上御書中例ながら有難事数々。大越母参りて一泊いたし候由、同人より預候届物、くし・糸等御越給り難有いと憚也。母上の御こまやかに御書、ひとり淋しく居れば誠に何寄嬉しく、度々にくりかへしい見す。孫等出立のしたく何くれとご配慮有さま誠にもつ体なし。殿様ご出立もはや三十日成たりと御かそへの御様子、御尤と恐察す。殿様よりも御細書御日記つふさに御認、拜見難有。おくに縁談断の由、縁の無成へし。市三郎のも出来ぬのにや。此たひは何共御申越なければ、これもとおもふ。御日記中いつもの事ながら、種くおもしろくもかなしくも有、たんそくもいたす也。太郎乳母の情合、さもことわりなり。おきつ願御聞済の由、切々嬉しく安心。大越兄参りて例ながら御懇意蒙る様いとく有かたし。ある人の娘、かしづくいと過たる事してあしき聞え有候事、切々歎息也。此人あまりに邪なくて夫にいたるや、もと愚也よりおこりしならむ。兄なる人、鯛のさしみに酒のみて酔ておのれか日記や文や見て、たわむれ事共いひしいとをここにそあれ。紫式部・松浦さよ姫にはあらで紫ちぶ・杉浦さよ姫位ならむとの殿の御言葉、大にをかし。されと夫もまだ過たらむ、紫もめん・せつたつらかわ姫位ならむ。いと顔の皮あつ姫と人やわらはむ。参る毎に兄なる人御酒給はりて酔てをかしき事共ならむと、おのれさへ心くるしきを、され歌、

きくたにもいとくくるしいさゝかのさゝに乱れてうたてうたてたまへ

おたまきならばよろしからむと笑ふ。御出立まへの印にや、亦御客来多きさま御日記にあらわる。番丁へ御まねかれ種々御地走の由、嘸久々にて御保養に成らせられしならむ。御うら山し。大越老母参上して種々御もてなし難有事共、御反物料、御丁嚙に頂戴物、度々の御心付、実に老母申上候通り恐入りたり。嘸悦つらむと返くも有かたし。おくによりも老母の事委しく様子文に書いていひおこせり。おもひの外丈ふの由、まつ安心也。年寄なれは一日も嬉しとおもへは、おのれか孝にも成むと、御配慮あつき事くれくもかしこし共かしこくて、中くに書尽しやらす。御隠宅女引越たる由、安心。是も美人のきこえ有しかは、此地にても皆たのしみ待也。よしさとの事、委細御尤。母上も御日記御らん、厚き思召を御悦御落るい也。付て御自身御不用の御小袖と、あしき帯とを御おくり被遣候と被仰。よつて金貳百足殿様より御母上へ被進に取斗ひ被遣に被遊候。三百足と被仰候へ共、御召もの等被遣候故、貳百足にて過候位と被仰候まゝ、成程さもと存候。幸ひ明日しなのや出立にて御用伺に出たれば頼遣す。廿日頃までには届くならむ。何とそ甲州へ御さし立被遣候様に。如仰誠に御二方様も新家も御高運の限也。おのれの愚歌御賞し恐み候。いこま根の歌、心得かたくとの御沙汰なれと、そはおのれはよきつもり也。ならにては西にいこま山をみて、みか月もそこにみえしか、難波にきてはいこまねは東（東）ににけて、あらぬみねよりみか月といふ心なり。されとわからねは、いかさま御ふしんならむ。在五中将の余流なり。すへて日記などによむ歌は多く在五風にていとあやしき限也。

われみてもあやしく成ぬよみおきの日記のひめ歌日数へぬれは

これは如何。

六日、晴。七十四度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。けふ御目附御着也。先例この御役宅へ御出御、両奉行・堺奉行其外御出、御達の由也。御朝御膳等出る事なれと、いまた御登坂なれば、此度は西御奉行より一式御持込にて、御家来其外共来りていたす。今曉八つ半頃御台所の人其外共来る。御奉行は御あかり引け位に御出御、目附方は五つ時頃御出の御様子也。民蔵初は一向に御構不申。御座敷向御向へ明け渡し也。四つ時頃無滞相済。右に付前広御向、順右衛門より内々心付け申たれば、本田公へ斗御菓子出したり。御持返りに成る。これ迄、御目附御交代或は長崎奉行其外御役人方皆御登坂あれば、東御奉行所にて御持切の由也。年中よ程の物入成へし。御城へちかきとがなり。年中御供かんはん位の違ひにてはうまらめ成へし。しなのや着とて来る由。江戸より御届の花色きぬ井に覆ヶ関よりの封もの届く。

七日、晴。七十度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。大坂砂糖高直に皆恐れて、飛脚料出してならの方宜なと民蔵いひて南都へたのみ、喜三郎より取寄たりしに、南都も此節は砂糖上りて春頃の直にうらずといふ。矢張、大坂と同直也。つまり飛脚料損して大に笑ふ。しかし目方ならの方多ければ、いさゝかはやすし。先日佐々木へ上むといひし、ならの不自由の品の書付取落したれば、今便相廻す。御覽ありてくるしからすは、御つたへ可然願ふ。此度、大越の母のもとよりあふまての心慰めに見よとの心にや、みつからのさしくしを給ひたり。いとさゝやか品の品にはあれと、老たる人のふかき心さし、いとかしこくて対面の心していはひの歌。

万代と母の栄をいはひくしいはひかさゝむとはにかしうら

難波にも大蜘蛛多し。江戸のも、ならのも、かに、形ち似たれと、ことにこのは大きくて、たこに似て足いと

長し。外にはすくなく家の内に多し。くそなどは白水をまきたる様也。かはや戸欄にすむなり。

九月八日。七十二度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。きのふ江戸状出して後おもひつく。夏蔭先生の短尺十二月、先年書給ひたりしか、其内を屏風にをし、或は望人にやりなとして不足に成たり。先生のはいつにても手に入ものとおもひて、油断して大に不自由する也。此節御宅へ御出もあれば、御短尺ねかひたし。遠国にては御高名をしたひ不斗所望さるゝ事も有ば、よく心ながら何卒十五六枚もねかひたし。雑の御歌など一枚もなし。残念也。短尺懸へかけ替て朝夕見るなれば、おのれこたひ師に対めもなくていと口をしく残念の心をくみ給ひて、あはれみて其料に書て給ひてよと御伝へをねかふ也。こゝの庭にゆうれい草のはなこゝかしこ咲。野にもあらぬにと人にいへは、誠一いふ、こは水野サマ御好にて植給ひし故也といふ。此君風流にてからめきたるをこのみ給ひしにや、千本の梅植給ひ、いなり社にみつからの碑文もたてゝあり。また大久保公は王子のいなり御信心の由。江戸より写、こゝの庭内に別に社を建給へり。りつは成御社也。石の鳥居に高橋茂兵衛など寄進とみえて名まへ有。されとみつからの信心にて建られたれば、御奉行かはれは御心くにて御信心のなき方も有へし。社も鳥井もあれて侘しけに成たれと、代々そのまゝにおかれしや。誠に母屋の軒近き所に有れば、あれたるみても神ながら心くるし。是みても永住せぬ地にはいかに信有共、社なといはひまつるは中くかしこし。心有へき事か。

九日、晴。七十九度也。きのふ夕より南風にて暖気。けふはあつし。

此御二方様御喜嫌よく重陽御祝一同も無事。江戸にて重陽御登城有て、御賑々敷御打揃御祝あるへしとおもひや

る歌、

一人にかさねて千代をいはふらしふる郷にくむきくの盃

くむ酒も菊のむしろもはえあらむふる郷人と打まとぬして

夕刻なにはにても例のことく御二方様へ御酒御吸もの上るさへも、おさんもおのれ斗なれはかひなし。民蔵まゐりてたすけたり。けふのいはひの心をうたふ。

旅にてもけふくみかはすふる里のたよりをきくといはふ盃

など例の在五風にてきこえぬ成へし。民蔵妻・順右衛門妻、礼に来る。さく・染はいさゝか不快にて不参。子供は皆来る。けふはあつくて小袖の時服いと難義也。夕刻より皆ひとへものに成る。

十日、小雨。七十二度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。

十一日、晴。七十五度也。袷着用。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。今日など日数がそふれは、はや江戸御発駕も二十日斗の日数に成たり。嘸御したくにて御混雑、御客来はいよくひまなく、母上のをしむ御名残りさまたけならむ。此頃は母上の御うへのみいひて御いとをしとおもふ。先年ならへ出立の頃は、おのれやみほけていたれは中くにおもひあさかりしか、こたひはさまくおもひやる事いと多し。大坂は野菜不自由ときゝしか、少しもさし支なし。ならより品多し。けふ御たい夜御霊供にれんこん取寄しに見事成事、中く江戸にてはなき大きき也。松たけなとも沢山あるよし。

もはやうりにくる。十本にて式刃五分位也。末に至りては五分位に成ると人いふよし。

十二日、雨。七十一度也。

御二方様御喜嫌よく一同も無事。けふは御難に付、例の通、萩餅出来る。市三郎の事噂いたす。江戸にて御賞味嘸とおもふ心をよめる。

忍ぶかな萩の花みてあなづまと露たる斗あこのゑみ顔

きこえぬや。けふ江戸へ書状出す。八重嶋方へ御参府に付、何ぞ被遣候や。もし、いまだ不被遣候は、御立前にも何ぞ可然願ふ。不足無人故、せうゆ一樽にかつふしか、或は手しほ皿の御到来なと一箱も添被遣候は、宜からむとおもふ。佐々木へ待請には沢庵一樽、菜漬一樽が宜とおもふ。また日間あれは伺ふ。

九月十三日、晴。七十二度也。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。乍去今朝よりさと例のかしらいたく、はきてふしたり。余病なし。今夕、月のはれたれと、いたつらにみす。御二方様へ御酒御吸物上る。民蔵・順作、御相手に参る。たんこもこしらへる。音斗枕にひきて、見る事もせず。残念也。江戸の事共おもひやる。御月見は御賑やかならむか。月見過ては御発駕にいよくちかつく。母上の御心いかゞ定まらせ給ひけむ。

十四日、晴。けふは、ふして寒暖不斗見。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと、けふも同へん也。

十五日、晴曇。寒暖不斗見。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと、いさゝか宜。夕刻になりて例の通湯漬くう。もはや気分宜。江戸より九日出御状着。

十六日、雨。六十六度。秋冷強し。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。さと、今日全快。昨夕江戸よりの御状御日記共とりく拜見。御一同様益御喜嫌御宜、恐悦。母上より御書有かたく、此節は御すこやかにあらせられて、恐悦。御日記いつもく御細かに伺ひ候。おきつ宿下り、久々にて御対面有候事、御かたみの御悦をし斗る。下宿まへより色々もめて、かけなから心くるしかりしか、御対面も有、ことさら御打揃賑々敷、御めつらしき御まとゐの御物語、かつ、おきつの画に御前の御即讀、ともにくかん吟奉る。母上の御満足はさら也、御前もいか斗にや御悦ならむ。おきつ、やつす宜との由、さもといとなつかし。御殿の人は一人昔の事さへおもひいて、よそ人さへおもへは、おきつにおいてをや。夫に付ても御懐旧のひとつ恐察也。太郎、井上御二人をしたふ事、尤可憐。乳母また気性もの、かんふく。おくに縁談思ふ。御懇由、重畳。しかし年違、いかゝとおもへと、眞方所望ならば、しさひ有まし。ことに媒人も外ならねは、市三郎の方は母上御書中に半断と有れば、縁無ならむ。母上御登坂御まよひにて、御治定に至らす由、御尤也。市三郎にくからぬ顔に付、大越母の龐言の咄、大笑也。おのれ年若き内、人にもみ帯もらひたるをみて、人形のやうといゝたるを、人のきゝたかへて、大に笑ひたる咄し成へし。おのれと市三郎と一対の物かたり、よき取合せなり。村田翁の春画のはなし、いとをかしくも、またかんしたり。忠四郎身分の事、委細承り安心。貞五郎縁談之事、いと厚き御事共ありかたく、これも安心。こたひの御日記は安心の事のみ伺、

いとく嬉し。ことに、おきつ宿下りにて、御一族御打揃御満足のさまなど、紫女・清女などに記させなは、榮花物語ともいひつへし。返々もいとつるはしき御まゝにこそ。

十七日、晴。六十四度也。よろしき時候に成る。

此御二方様御喜嫌よく一同も無事。たつなとも勝南院薬きゝたりや。六月頃よりは月々めぐりにも成とて大に悦ぶ。大坊主へたでもなし。此地いしを御目きゝ、今より願ふ。きのふは江戸状着て嬉しきと病後のくせとにて、昨夜はねむらす。色々江戸の事や世の事やおもひつゝ。ふとつかまつりの事思ひ、これもしんぼうつかまつりし印に、結構に昇進つかまつり、いかに有かたからむ。妻なくむかへしか、いかゝつかまつりしや。夫に付ても、きよし千文なと心から乍あはれと思ひて、

ひとつ野の小草なれともさまゝよめてゐるゝあり捨ゐるゝあり
よしやこれも人やりならず。

直からぬ枝はおのれとよけられつおなし一木の花を折にも
またおもふ事有て、花と松とをよめる。

散をうらみさくをたのしむ花そ花とわなる松の色は品なし
とはおもへとも、

人心みやひは花にならふとも根さしはふかき松にこそあれ
また、

中く松の操はかけ高ししたり柳にこころなちはむ

これは日記にもあらねと、けふ江戸へ状出すに、日記の料紙の明地あれば、記し入て御系み草になす。

高子

『高子日記』人名索引

〈凡例〉

項目は、できるだけ姓などを補った形で立項した。

屋号・店名は、人物を指す場合には立項した。

項目名のある箇所は、例えば、七月二十六日は「26」という形で示した。

別表記で同一人物と思われる場合は項目の下の() (中に別表記形を示した。なお、別表記形も項目を立て、で見出し形を示した。

女性名の頭に附される「お」の字については略した形を項目とした。

青物や某	あ	26
跡部	3	26
在原兼平(在五中将)	5	9
阿波守	15	9
い			
幾之進	7	7
池田	22	7
板倉の兄弟	25	7
板倉内膳正	4	7
市三郎(市三)	11・14・23・27、	12・13・15・20・21、	4

井上新右衛門	15・19・22、	5・12・16	29、	13、	15・25、	11	16
いはき升や
う								
宇佐見左門
歌
梅木
え
栄
江川太郎左衛門
お
大久保公
大越
大越貞五郎
大野道軒
小笠原
か
かゝや助藏(かゝや、加賀や)
角馬
花台院
刀屋志右衛門
かつはや
紙井戸や

川上金吾助 28、 1
 川路 1、 18、 19
 川路敬次郎 12、 25
 川路太郎 7、 12、 13、 20、 21、 15、 25、 5、 16
 喜久左衛門 12、 20
 菊寿 10
 菊屋 8
 喜三郎(そつし喜三郎、そふじ喜三郎) 29、 5、 7、 28、 15、 26、 5、 6
 紀貫之 25
 興福院尼(興福院) 29、 6、 24
 京山 山東京山 23、 20
 桐山 20
 きん 8
 く 7、 13、 20、 21、 22、 5、 16
 くに 22
 熊谷直実 1
 敬次郎 川路敬次郎 29、 8、 28
 健 26、 6
 源七 6

源助 16
 健之丞(建之丞) 15、 10
 御門佐蔵母 2
 虎弥太 26
 権五郎 26、 27
 在五中将 在原業平 26
 着定 26
 着や理助(さかなやり助) 2、 16
 坂もと 13
 佐木 14
 さく 9
 佐久間象山 24
 佐々木 11、 29、 26、 15、 7、 12
 笹屋七郎兵衛 29、 2
 佐蔵 22、 2
 貞五郎 大越貞五郎 22、 23、 25、 26、 27、 28、 16、 19、 20、 21、 24、 9
 貞助 9
 左門 宇佐見左門 12
 山東京山 10

紫女 紫式部 し
 しのや 5・6
 柴田 27
 しま 26
 順右衛門 15、28
 順作 6・7・8・19・21・22・26、
 5・6・15・17・24、 13 1・3・8・10・14・
 松月 15
 勝南院 11・12・13・14・27・28・29、
 16・17・20・22・25、 17
 次郎 川路敬次郎 20・22・23・26
 真悦
 新右衛門 井上新右衛門 11、
 新家 15・25、
 すがの助 26
 す 5
 せ 8
 誠一 1・25、
 誠一郎 14・24・25・28、
 清少納言(清女) 16
 そ 10・12・18・26
 宗吉 26

そうし喜三郎 喜三郎
 そふじ喜三郎 喜三郎
 染(そめ) 17・24、
 た 9
 平敦盛 1
 高橋 13、
 高橋茂兵衛(茂兵衛) 3、
 田口 9
 忠四郎 19・21、
 たつ 11・13・14・28・29、
 伊達千広 29
 民蔵 11・15・22・23・25・28・29、
 3・5・24、 3・6・7・9・13
 為四郎 花井為四郎 21・22・24・26、
 太郎 川路太郎 26
 ち 26
 千広 伊達千広 23、
 つ 3・7・9、
 て 16
 鉄作 11
 と 26
 豆ふ子僧 26

時(とき) 7、10・28
 土岐公 24
 俊蔵 11・12・23、7・18・21・24
 留 8
 とらえ 28、7
 な 7
 内藤左衛門 13
 直之進 10
 中条 23
 中野 18
 夏薩 前田夏薩 23
 なら 11・14・24、3・10・26、23
 に 23
 西さま 11
 西村 15
 二条宰相 23
 二条 14
 は 26
 八助 11、26
 花井父子(りう助 為四郎) 26
 花井為四郎 26
 花井りう助(花井隆輔、りう助 隆助) 11・22・23・24・28、
 3・7・9・16・18・19・20・21・22・26・27・29、
 16

寿美(寿よし) 8・25、1・6・7、8
 土方八十郎 19
 ひたちの姫君 10
 へ 10
 平助 26
 別当子僧(別当小僧) 16
 26
 29、26、
 ほ 16
 宝蔵院 12
 本田公 6
 3
 ま 6
 前田夏薩 29
 29
 政 7・8・9
 29
 松浦さよ姫 5
 まんちうや重次郎 2
 2
 み 2
 水野 29
 8
 めう寿 20
 20
 む 16
 紫式部(紫女) 5
 16
 村田の君 17
 16
 も 16
 茂兵衛 高橋茂兵衛 16

若狭や	2
隆助	26
りう助	26
りうけい	24
花井りう助	26
花井りう助	26
り	5
与助	5
よしさと	5
よ	11
柳屋	12
八重嶋	18
や	18
もめんや	18

(口止)
(句)